

シェイクスピア学と科学技術社会論

草 薙 太 郎

(0) はじめに

シェイクスピア学と科学技術社会論を結び付けることは、決してこじつけの奇をてらうことになるわけではない。そのことをサイエンス・プラザ（科学技術振興財団 東京本部）で開催された文部科学省科学技術政策研究所主催の国際シンポジウム'02『21世紀における科学技術システムの再構築と科学技術政策の新しい役割』に参加して実感した。

欧米ではすでにある程度の蓄積があるものの、日本ではやっと学会が立ち上がりかけている科学技術社会論という学問領域と、シェイクスピア学とにかなりの接点があることが、この「科学技術政策」を強調したシンポジウムに誘われて参加することによって実感することが出来た。そのことを以下、述べてみたい。

ニュートンからアインシュタインへといえば、世界の科学史の流れの主流である。英国からアメリカへ主軸を移しながら、ここ四百年、この地球をグローバリゼーションという一つの流れに方向付けたアングロ・サクソン民族の強さの中心とあってよい。科学の原理的な発見が科学技術の発展を生み、それが市場経済での繁栄をもたらし、アングロ・サクソン主導の政治がその繁栄をとりしきった。一方、様々な環境問題をはじめとしたグローバリゼーションの影の部分も深刻化し、テロリズムも放置できない問題となった。

この「影の部分」は2001年9月11日にニューヨークで起った世界貿易センター・ビルに対する自爆テロと、その後起った炭疽菌騒ぎに象徴される。つまり自爆テロという宗教と宗教やマイノリティー意識にからむ心理、それから炭疽菌という「弱者の核兵器」、つまり生物兵器である。

これは上記のシンポジウムにも深く関係している。先述の「ニュートンからアインシュタインへといえば、世界の科学史の流れの主流である」と規定すること自体、すでにバイオテクノロジーの発展、DNAやゲノム研究の進展で掘り崩され、「ニュートンの古典力学と、その修正、拡大としてのアインシュタインの相対性原理」を中心にすえた科学は大きな革命期を迎えたとする発表¹があった。この発表者は、そうした正統派科学に対して人工物システム科学なるも

¹ YOSHIDA, Tamito, 'The Second Scientific Revolution': Six Turns in Its 'Paradigm' in Capitals, Plenary Lecture 2, in NISTEP International Symposium '02, Feb.28(Thu) & Mar.1 (Fri), (2002).

のを提唱した。(正確には提唱されていることを紹介した。しかし、様子から察するに、科学技術社会論という文脈の中での紹介は発表者独自の視点によるものと考えられるので、この文脈の中では「提唱」といいようには感じられた。)

この発表の当否、精緻に構築された論点についての論評は追々ずるとして、少なくともニュートン以来の正統派科学が大きな変革を迫られていることでは(様々なレベルでニュアンスの違いはあるものの)参加者はおおむね一致した。正統派科学が支配し、その学識のある専門家(科学者)が独占的に権威を持つ状態をモード1とし、その状態が崩されて科学の概念が再構築されつつある現状をモード2として議論することは、シンポジウム全体のコンセンサスを得ているようであった。

キーノートスピーチ²によると、モード2で再構築されるべき科学の概念としては、Jasanoffのいう serviceable truth と Nowotny のいう socially robust knowledge が重要である。(そのことは、御本人たちの発表でも裏付けられた。)

シェイクスピア学との関係で注目されるのは、Jasanoff については、西側諸国で「18世紀の終わりに憲法が国家権力を制限したように、現在企業の権力を規制する憲法制定に挑戦すべき」としたこと³、Nowotny については、「啓蒙思想の合理性とロマンティックな主観的、美学的側面、想像力と感情の領域がポストモダン思想で統合され、市民と科学が対話するアゴラを提唱する」とした点⁴である。

こうした点とシェイクスピア学とがいかに深い関係にあるか、追々説明してゆく。

興味深かったのは、モード1、モード2の現状認識では一致しても、この人工物システム科学なるものを提唱した発表については、日本人参加者にはある程度の理解があったものの、欧米からの参加者はほとんどを理解しなかったことである。英語への通訳が困難であったからとし、追って出来上がる英語版に期待して欲しいとの発表者のコメントがあった。しかし私は本質的なことで人工物システム科学は欧米には理解されにくいと思う。

こうした論点の詳述は追々ずるとして、しばらくはニュートン、アインシュタインと受け継がれる正統派科学、アングロ・サクソン中心のグローバリズムの流れを追ってみたい。

シェイクスピアの活躍とその再評価は、この流れにのっている。

このことを(1)『嵐』とニュー・アトランティス(2)王立協会(3)マローンのシェイクスピア・テキスト校定(4)米国学位論文の四項目で説明したい。その中に上記で「詳述は

² KOBAYASHI, Shinichi, *New Articulation of Science and Technology Systems in the 21st Century*, Keynote Speech, in NISTEP International Symposium '02, Feb.28(Thu) & Mar.1 (Fri), (2002).

³ Jasanoff, Sheila, *Science, Technology, and the Constitution of a Global Order*, Session 4, in NISTEP International Symposium '02, Feb.28(Thu) & Mar.1 (Fri), (2002).

⁴ Helga Nowotny, *Re-thinking Science: From Reliable Knowledge to Socially Robust Knowledge*, Plenary Lecture 1, in NISTEP International Symposium '02, Feb.28(Thu) & Mar.1 (Fri), (2002).

追々する」とした点を織り込んでゆきたい。

(1) 『嵐』とニュー・アトランティス

シェイクスピアの活躍とその再評価が、グローバリゼーションの流れにのっていることを象徴するのは、シェイクスピアが一度廃れ、王政復古期に再登場したときのことである。シェイクスピアはすぐれた劇作家であっても、もはや過去のものとなっていた時代に、「文学者にも理系の学問を」と主張する詩人で劇作家のジョン・ドライデンが、再びシェイクスピアを英国演劇の中心に押し上げた。ドライデンはシェイクスピアの『嵐』を改作した。そのとき、当時英国の科学技術発展の中心であった王立協会の実験を意識して、異性を見たことのないもの同士が絶海の孤島で出会ったらどうなるかといった実験劇的な要素を盛りこんでいる。そのとき王立協会で活躍していた本物の科学者はロバート・フックであり、アイザック・ニュートンであった。(こうした人々による科学技術の発展が中核となって大英帝国が発展し、繁栄がアメリカに受け継がれて、やがてグローバリゼーションの流れとなる。)

このドライデンの改作は、原作にはないものを後から強引にくっつけたといったものではない。シェイクスピアの原作にもともと絶海の孤島にたどり着いた人々を通して人間の様々な営みを描く実験劇的な要素があった。

この『嵐』で描かれた孤島のモデルはフランシス・ベーコンが夢想して死後出版された本に描かれたニュー・アトランティスであると断定したら、断定に過ぎるであろうか。(年代の前後については、生前ベーコンが語ることをシェイクスピアが聞いていたとか、現存しない別の書き物でシェイクスピアが知ったとか、説明はつけられないことはない。シェイクスピアの『嵐』もベーコンのニュー・アトランティスも、17世紀初頭という、ほぼ同時期の発想であることは確かだ。)

『嵐』で描かれた孤島は魔法が支配する島であって、ベーコンの自然科学や科学技術への想いが結実したニュー・アトランティスとは違うように見える。けれど、そもそも魔法と科学とは極めて親しい関係にある。(つまり正統派科学が現在変革を迫られているといっても、正統派科学はその発生時から非正統派科学と隣り合わせであった。)

錬金術や異端の聖書学に手を染めたニュートンを最後の魔術師と呼ぶ人々もいるように、魔術と科学は一体である側面があって、そのことをフランシス・ベーコン自身がみとめている。(‘Advancement of Learning, I’ではAstrologyとNatural MagicとAlchemyの科学としての有用性をみとめながら、葡萄畑に黄金が埋まっていると父親が遺言し、息子が掘り返して黄金は見つからず、しかし掘り返しが葡萄の根に好い効果をもたらし翌年からの実りに成果があっ

たというイソップの寓話を紹介している。)

そもそも王政復古期に英国の科学技術探求の中心になった王立協会こそは、ベーコンが夢想した、アングロ・サクソンのモラルと科学技術が支配する絶海の孤島ニュー・アトランティスの理想を、現実のロンドンに実現したものであった。とすれば、そこで行われる実験を意識してドライデンがシェイクスピアの『嵐』を改作したことは、『嵐』の孤島のモデルがニュー・アトランティスだという仮定に立つ限り、まさに本質をついていた。

この仮定をみとめてもみとめなくても、グローバリゼーションの中核をなす科学技術の発展をアングロ・サクソン中心に見据えるとき、発展の立て役者としてニュートンとアインシュタインだけではなく、フランス・ベーコンを加える必要があると思う。(つまりニュートンは非正統派科学を実践していたものの、正統派科学との統合した理論を発表したわけではなく、ひそかに実践して秘密にさえていた。ベーコンが非正統派科学を実践していたかどうかは定かでない。正統派と非正統派を統合する科学理論を構築したとまではいえないものの、しようと努力したことは確かだと思う。科学理論を提唱する論文に非正統派科学の有用性を書き込んだというだけの意味においても。)

正統派科学のみの視点から評価し、工業化できる狭義の科学技術の基礎になる科学原理の発見だけをいうなら、ベーコンは後の二人(ニュートンとアインシュタイン)に比べて功績は劣るかもしれない。けれど、精神分析を含む心理学や政治経済、国際問題への洞察といった人文科学、社会科学の領域を加えるなら、負けてはいない。ニュートンの活躍の舞台でもあった王立協会は、当初はこうした領域まで研究対象とした。(例えば当初ばかりか18世紀後半になっても、王立協会は母親とロンドンを訪れたモーツァルトの天才ぶりを記録し報告し、報告を協会紀要に掲載したりして「科学」の対象としている。シェイクスピア劇の演技や言語の習得の天才になぞらえた記述が興味深い。一方、上記の人工物システム科学を提唱した発表には、各種音楽理論も「精神的人工物を設計・構築するプログラム」として人文科学の対象になるとされる。情報科学畑の発表者がゲノムなどに注目した結果出来た「プログラム」を強調する科学の統合理論である。王立協会という、いわば歴史の中の「文理融合」と、現在の科学革命との関係は追々論じてゆく。まずは王立協会に注目してみたい。)

(2) 王立協会

この項はさらに細分して 政治と科学が絡む王立協会 王立協会におけるモーツァルト研究の意味 「清らかさ」志向と王立協会、の3項目に分ける。

政治と科学が絡む王立協会

ニュートンは物理法則や光学の原理的発見以外に錬金術や異端の聖書学に手を染め、造幣局の監事から長官にまでなって政治に少しは足を踏み入れた。同時に王立協会の会長にもなって科学界に君臨した。もともとホイッグでプロテスタントという強い主張があって、カトリック好みのジェームズ二世に対しケンブリッジ大学選出の国会議員として抗議運動をし、名誉革命に続くウィリアム三世治世下で力を得た。しかし、これは政治家というより政治闘争の闘士の側面ともいえる。むしろトーリーの大蔵大臣オックスフォード伯爵ロバート・ハリーの下での造幣局勤めで本物の政治を体験したともいえる。またヨーロッパの科学者として国境を越えたつきあいがなくもなかった。しかし国際問題に取り組んだとは言いがたい。もちろん国際的に活躍した哲学者ロックとの親交によって、国際問題について突っ込んだ議論をしたことはあるにはあった。

以上の記述のキーワードは政治である。従来ニュートンと政治の関係を語るとき「研究の先が見えてニュートンは政治に手を染めた」という言い方もなされた。「純粋正統派科学を志向する科学への信仰と、そうした信仰の躓き」といった趣きの観点である。いわゆるポス政治的な政治と「異端の学」が結びついた当時のニュートンが関わった非正統派的要素を考慮すれば当然の観点ともいえる。けれど文部科学省科学技術政策研究所主催の国際シンポジウム'02『21世紀における科学技術システムの再構築と科学技術政策の新しい役割』では、狂牛病発生と、その安全対策のように、安全性を真に科学的に検討するには時間がなく、それを検討できないまま見切り発車で「ここまでは安全、ここまでは危険」といった発表を迫られる際の「科学的」判断をするには、どのような「科学者」（科学者として誰を選定するかも問題になる）を集めて意思決定すべきかが問題になった。ニュートンが造幣局の幹部として意思決定したよりもっと複雑な意思決定を現代の「科学者」は迫られている。それで大臣の首がとぶこともあるとすれば、そうしたことが「政治」でないとはいえない。そうした「政治」に関わることは、もはや「科学への専念義務的信仰の躓き」ではない。

アインシュタインの時代になると、ニュートンが手を染めた錬金術や異端の聖書学は、フロイトからユングを経て、さらに発展した臨床心理学者の手に渡っていて、もはや狭義の科学者の担当範囲ではなくなっている。ユングに『錬金術』と題する長大な著作があるように、精神分析学は、まずカトリックを中心にしたキリスト教の精神的支配下の心の問題を、キリスト教を越えて考察し治療をはかろうとする「異端の聖書学」的側面があった。これはアインシュタインの時代には科学者とは別の専門家の手にゆだねられると同時に、心理カウンセラーという新しい職種を生んだ。主治医や弁護士などと並び、個人として心理カウンセラーと契約できることがアメリカのステイタス・シンボルになるほどの普及をした。

このことは「精神的人工物を設計・構築するプログラム」として情報科学畑の発表者がゲノムなどに注目した結果出来た「プログラム」を強調する科学の統合理論と関係すると思う。「人工物システム科学」の発表は、なぜか臨床心理学には触れていない。一方で、ゲノムなど分子生物学の昨今の発見はアインシュタインの相対性理論に優る科学革命を起こすものともいう。

「アインシュタインの相対性理論に優る科学革命」という台詞はどこか別の場所で聞かされたことがあるように思う。確かフロイトによる無意識の発見こそが「アインシュタインの相対性理論に優る科学革命」だと唱える説である。(これを是とするには、果たして「無意識」なるものを導入する臨床心理学が科学か擬似科学か、決着をつける必要があるにせよ。) アメリカでは二十世紀になって市場経済が発展するにつれて企業家精神への自己啓発が盛んになる。そこで傷ついた心の治癒のために臨床心理学カウンセラーが必要になる。市場経済の中で戦いに時々傷つくことこそある程度成功した証であって、だから心理カウンセラーと契約することがステイタス・シンボルになった。ユング派の心理カウンセリングではフロイト以来の「無意識」が活躍する。個人のものだけでなく人類が共有する「集合無意識」といった概念もユングは提唱した。

同じく「アインシュタインの相対性理論に優る科学革命」とされる「人工物システム科学」とフロイト、ユングが問題にする「無意識科学」に共通点がないわけではない。ガリレオやニュートンを情動的に支えた「神による全自然の設計」という考え方から「生物的・人間的世界の、生物と人間自身によるプログラムの設計・構築」への転換をするものだと「人工物システム科学」を紹介する発表者はいう。キリスト教の「設計」論的自然観を脱宗教化して、一部復権させ、「法則」一辺倒の近代科学から脱皮するものともいう。

もし人間の無意識とゲノムなど分子生物学的構成要素との間の、はっきりとした関係が立証されたら(それは無意識に関わる科学が擬似科学でないことの何よりの証明になる)、無意識もゲノムも、ともに新しい科学革命を起こしたことになる。ニュートンの古典力学のような法則中心の科学ではなく、人類が生物として内包するプログラムを探求する科学への転換になるからである。

疑似科学か否かということは信仰と科学との微妙な関係に触れる問題でもある。「人工物システム科学」を提唱する発表の中に「神も人工物である」という発言があった。そしてこれまで人文科学系の学問対象とみられた精神文化も「人工物」として科学の対象になるという。だから「自然科学」ではなく「人工物システム科学」を提唱するという。

「神も人工物」という発言は、それだけで欧米人には無神論と受け取られかねない。また、町工場ではミシンに御神酒を供えて神性が宿るものとして感謝を捧げたりする日本人特有の信仰や、禊をして神主のような格好で刀鍛冶などを行う日本独特の工学技術と宗教心との関わりも連想する。

「人工物システム科学」には日本独得の「科学技術」を支えた日本固有の信仰の匂いがして、唯一絶対の超越神を奉じる欧米人に対し（そのことと欧米の科学が結びついていることは繰り返し多くの識者が述べることである）改宗を迫るような異文化の衝突の趣きがある。上記の発表に対する欧米人の聴衆の無理解の壁は強固だと私は思う。

いずれにせよ現状は疑似科学とは何かについての「立証」を待たずに（また信仰と科学の関係の解釈に決着がないまま）進行している。市場経済と市場経済で戦い傷付くものの癒しとしての無意識に関わる臨床心理学カウンセリングは世界を席卷する勢いになり、その流れの中でヒト・ゲノムの解読がベンチャー企業で成し遂げられる事態にもなっている。「革命」は、いかなる革命かを解釈する前に起こってしまっている観がある。

そこにはアングロ・サクソン特有の政治性（ないし政治性をおびた活力）が絡む。その最初の例として王立協会の場合があった。

ニュートンの古典力学だけではなくモーツァルトの天才ぶりまで問題にした18世紀の王立協会は、現在「科学革命」として問題になる「革命前」と「革命後」の二つの要素（近代法則科学で割り切れるものと割り切れないもの）を、双方とも問題にしていたともいえる。

その問題の仕方が問題である。王立協会は母親とロンドンを訪れたモーツァルトの天才ぶりを記録し報告し、シェイクスピア劇の演技や言語の習得の天才になぞらえた記述をした。八歳の少年の音楽が当代一のシェイクスピア役者ギャリックがシェイクスピアを演じるときのような深いパトスを聴衆に与え、少年の能力として、それが習得に難しい様々な言語でも同じことができるようであったという。

さらに深くアングロ・サクソンの政治性を考えるために、次にモーツァルトと王立協会の関係を考えてみる。

王立協会におけるモーツァルト研究の意味

人文科学と自然科学の統合理論を構築するので難しいのは、人文科学では価値評価が重要な点である。ソナタ形式や19世紀西欧音楽の和声学や対位法理論、そこに革命を試みた現代音楽理論などは、確かに「プログラム」として捉えうる。しかし、それはモーツァルト研究など近代音楽研究や現代音楽研究にとって重要事項ではない。モーツァルト時代の音楽理論がモーツァルトを生んだにしても、理論だけではモーツァルトは生まれえない。理論だけなら優秀な音楽大学の学生なら現代でも誰でも習得できる。

モーツァルトの音楽理論研究でむしろ重要なのは西欧音楽の和声学理論にむしろ反することをモーツァルトがしばしばやりながら、しかも聴衆に完璧な形式美を感じさせる独得の世界を築き上げたことにある。

それより何より、まずモーツァルトの音楽が高い評価を受け、「何故このように素晴らしい音楽がこの世に出現したか」という問題意識がモーツァルト研究の根底にある。その点を王立協会の「モーツァルト少年の天才ぶり現場報告」は外していない。

このことを換言すれば、人文科学の客観性、普遍性が自然科学ほど強固でないからといえる。モーツァルトを素晴らしいと思う人は多くとも、ニュートンの落下の法則ほどの普遍性はない。

モーツァルトの音楽に多くの人が感銘したにしても、そもそも音楽には感情が伴い、感情は人により、また同じ個人でも時と場合で揺れ動く。はじめから客観性、普遍性から遠い面がある。それにも関わらず、今日モーツァルトが時代遅れだという声はあまり聞かれない。ニュートンの古典力学が、科学探求として注目されるものとしては、別のものにとって代わられる、もしくは唯一無二の科学原理ではなくなってきたという、「科学革命」がささやかれているときに。

一方、物理学と音楽には意外に近い面がある。(モーツァルト研究は、アングロ・サクソンとヨーロッパ大陸の「哲学」の違いを際立てる。それはシステムと「清らかさ」志向の違いともいうべきものである。「物理学と音楽の近さ」は、それを説明することにもなる。)

ニュートンは実験・観察と数学を結び付けた。人間の頭脳の中だけの整合性と、この世に実在するものとを結び付ける営みだといえる。同じことが芸術についてもいわれている。アリストテレスのヨーロッパ詩学の伝統ではミュトスとミメシスという言葉で表される。神話と模倣である。モーツァルトは音楽理論と人間の感情を結び付けた。当時のヨーロッパ各地の音楽理論の集大成は人間の頭脳の中の整合性追及である。ピタゴラスからグレゴリオ聖歌を踏まえたヘヴライ・ヘレニズム文化のもつ音楽の神話・ミュトスとっていい。音楽における「数学」だともいえる。一方、オペラに代表される作品で、当時の社会を描き、フランス革命前後のヨーロッパ社会の構造を喜怒哀楽の感情で表現した。この世に実在するものの模倣としての芸術である。音楽における「実験・観察」だともいえる。

これに関連して人工物システム科学を紹介した発表者は「私は、ソシュールに倣って、ということは英米系の多くの記号論とは異なり、指示対象の存在をシンボル記号の定義要件に加えていない」という。これを私なりに咀嚼すれば、言語を中心にした記号論で、ソシュールの言語理論は「数学」であり、英米系の言語理論は「実験・観察」を重視する科学(物理や化学)だともいえる。実際、数学記号と、それが表す数学で扱われる概念とはソシュールのいうシニフィアン(記号)とシニフィエ(内容)の関係に似て、この世の实在物を表す必要はなく、数学の世界だけで完結している。(もちろん、これは比喩の話であって、本当に数学記号にシニフィアン、シニフィエ関係が考えられるかどうかを考えているわけではない。記号内容の事実関係に関わりなく、記号間の連合関係だけで記号内容が決まってしまうことは理工系の記号体系では起こりにくい。強いていえば、電子の電荷をマイナスと決めたために電子の流れと逆に

電流の方向がなくなってしまうことであろうか。コンピュータ会社が違うためにコンピュータのソフトや各種装置の互換がうまくいかない問題などは、閉じた体系が外部との接触を拒んだり、不整合を起こして便宜的な工夫が必要になるという意味で、ソシュールの言語理論から引き出される「言語空間は実在する世界との対応が不可欠ではなく体系として完結している」「従って異なる言語間のあらゆるニュアンスを訳出する翻訳は、実在の世界だけでは解決がつかない要素があって不可能」といったことに酷似するシステムの問題ではある。このことはやがてシェイクスピア論で重要になる。）

ソシュールに限らず、人間の脳の中だけで完結するシステム志向がヨーロッパ大陸の傾向で、現実との関係を重視するのが英米系、つまりアングロ・サクソン民族の傾向だといえると思う。

「人間の脳の中だけで完結するシステム志向」か「現実との関係を重視する」という観点で王立協会をながめると、強調すべきは王立協会が実験・観察を重視したということより、王立協会に「政治」の要素が強く働いていることである。アングロ・サクソン民族は科学に限らず、あらゆるものに「政治」が入り込んでくる傾向を持つ。

このことは冒頭で紹介した新しく構築すべき科学の概念について Jasanoff というハーバード大学のケネディ政策研究大学院の教授でアメリカを代表すると思われる研究者が「18世紀の終わりに憲法が国家権力を制限したように、現在企業の権力を規制する憲法制定に挑戦すべき」という風に「政治」や「権力」にこだわるのに対し、Nowotny というスイス連邦工科大学教授でヨーロッパを代表すると思われる研究者が「啓蒙思想の合理性とロマンティックな主観的、美学的側面、想像力と感情の領域がポストモダン思想で統合され、市民と科学が対話するアゴラを提唱する」という風にシステム志向であること（アゴラというヘレニズム文化の対話伝統は、結局、対話を通じて人間の脳で完結するシステムを構築することで、すべての問題を解決しようとしているのではなかろうか。）にも反映する。さらには最近の京都議定書をめぐり環境問題はヨーロッパと日本が「アゴラ」的対話をして温暖化防止のシステムを築こうとしたのに対し、アメリカが「政治」と「権力」のダイナミズムを肯定した上での「憲法」を模索したといえる。

ヨーロッパ大陸を中心にした価値観と、かつてはイギリスを中心にし、現代ではアメリカに主軸を移したアングロ・サクソンの価値観の対立は、これから21世紀にむけて深刻な問題になってゆくと思われる。（これは、明治の脱亜入欧と戦後のアメリカによる占領政策でもろに問題を共有する日本だけではなく、アジア全体の問題でもある。シルクロードの昔に溯れば、そもそもヨーロッパ大陸を中心にした価値観はアジアに原点があるともいえる。その後植民地問題を経て、現在アジアはアメリカ的価値観の侵入で揺れている。）

その和解と統合は、単なる思索の結果としての理念的なものではなく、具体的な事例を歴史からも現状の分析からも汲み上げた実際的なものである必要があると思う。そこにシェイクス

ピア学が関われる最も重要な点でもある。

こうした対立は18世紀以前にまで遡る。

ニュートンの登場も、デカルトやライプニッツといった大陸系のシステムを重視し過ぎた傾向に対して、実験・観察との整合性を重視して物理学法則の正解を見出したとも解釈できる。しかし、それはニュートンが実験・観察に固執したというより、名誉革命前後で示した革命の闘士の側面の方が重要だと思う。

ニュートンは現実の政治的意味合いも含めて革命を起こしたかったのだと思う。単に神の設計した自然についての法則探求がしたかっただけではない。

カトリック教会が主導した中世以来のヨーロッパ大陸の知の体系が誤った宇宙観を人々に強要するから、それを是正したい想いはニュートンにあったと思う。当時のイギリス人の革命感覚は「清らかなもの」対「汚れたもの」の二項対立を踏まえていた。(こうした表現は日本語でいうと唐突に聞こえる。英語では clean と dirty, truth と false, pure と impure といった清濁感覚のある対立概念は現代日常で頻出し、シェイクスピア時代まで溯れるアングロ・サクソン民族の特徴だと思う。) また後述のように、モーツァルトとこのことが関係する。

そもそも清教徒革命、王政復古、名誉革命、ハノーヴァー王朝の招聘と続く一連のイギリス史の流れは清濁感覚で説明がつく。汚れた王制を清らかな清教徒で倒してみたものの、実態はさして清らかでなく、王政復古に至る。汚れた大陸文化という感覚、「カトリック教会が主導した中世以来のヨーロッパ大陸の知の体系」は汚れているという感覚は、科学者でなくともイギリス人の多くが共有していたと思う。王侯貴族には汚れた大陸文化の匂いがある。一方、共和制はすぐに墮落して権力者のエゴがむきだしの「汚れた」状況になる。17世紀半ばから18世紀後半まで続くイギリスの政治的苦闘は、王侯貴族を迎えながら、何とか平均的なイギリス人が是とする「清らかさ」を維持したい努力であった。

ニュートンが「ホイッグでプロテスタント」を標榜し、いわゆるケンブリッジ・プラトニストの流れと密接な関係にあったことも含め、そうしたイデオロギーと科学探求を結び付ける解釈も行われる。しかしイデオロギーと科学探求が直接結びつくのではなく、「清らかさ」志向が背景にあってのことではなかろうか。「清教徒が科学を発展させた」という統計的には否定される見解が示されることがあるのも、アングロ・サクソン独特の「清らかさ」志向のせいだと思う。「清らかさ」志向が権力を生み、科学者が権力に近づこうとすると「清らかさ」志向が必要になるのがアングロ・サクソン独特の風潮ではなかろうか。それは必ずしも清教徒とかといったキリスト教宗派では割り切れない。むしろフランス・ベーコンの科学思想そのものの中に、この「清らかさメカニズム」の秘密があると思う。それは、すぐ後で詳述する。

人工物システム科学を紹介した発表者は、ソシユール流の人間の脳で完結するシステム傾向がシンボルとして必ずしも現実の対応物を持たないことから、宗教論にふさわしいとして、そ

の直後に宗教論を展開した。ここには、決して清濁の論理は入り込まない。ヨーロッパ大陸特有の、カトリック教会主導の神の論理が、事実上の無神論に行く理神論かといった論理の展開である。

神の設計した自然とか、知のシステムとかいったレベルで論じたら、ニュートンの宇宙観や神についての見解くらい矛盾に満ちたものはない。

アリウス派めいた見解でアタナシウス信仰箇条（三位一体を認める）を密かに否定しながら、政治的妥協で英国教会の教義を肯定するようにも見える。異端の聖書学に傾倒したり錬金術に凝ったりすることもあわせれば、ニュートンの神学システムは決して一筋縄ではゆかない。

けれど「清らかさ」志向では一貫している。それはフランシス・ベーコン以来の伝統である。濁りのない清らかな目で実験・観察をし、事象を見つめ、理論との整合性を求める。すっきりとした清らかな理論を組み立てる。それが、ヨーロッパ大陸が築き上げた虚偽に満ちて濁った知の体系への革命をもたらすと信じるのである。

「神が設計した自然の摂理を究める」「それまで神の位置であった場所に仮に人間を置いて自然をながめるのが実験・観察である」といった伝統的な科学哲学でも、こうした「清濁」の論理は説明できる。

一神教、唯一神の宗教体系の中で神の位置に人間を置くとは、個人主義の徹底になる。モラルの問題を度外視して、利潤追及の市場原理をそこに導入すれば、利益追求には何でもゆるされるマモンゴッドが支配する「汚れきった」社会が出現する。そこを規制するモラルとしては、個人利益追求の対極にあるものとしてのチャリティー、ヴォランティア活動になる。こうしたことはイギリスを含むヨーロッパ社会全体の特徴であるにしても、個人と神が直接対峙せず、僧侶の仲介なしには聖書を読むことさえストレートには肯定されないカトリック教会中心のヨーロッパ大陸より、そこに反旗を翻し旧社会打破をねらったイギリスの方がもっと徹底する。

それから後、いわゆるセックスや利権にまつわるスキャンダルがアングロ・サクソンの政治的特徴だといわれた社会が到来する。利権はともかくセックス・スキャンダルがフランスでは問題にされないことは周知の事実である。聖母マリアの像をくると回転させればヌードの女性像になり、敬虔な祈りの場がパーティの場に早変わりというフランスの精神風土は「清濁あわせのむ」古手の芸妓めいた体質を持つ。同時に「国境無き医師団」を生むヴォランティア精神もある。

キリスト教の精神構造として個人主義があって、それが個人の利潤追求と、それとは対極にあるチャリティー、ヴォランティア活動の組み合わせになるのは、ヨーロッパ大陸諸国もアングロ・サクソン民族も共通である。しかし、神と個人の対話にも教会がシステムとして介在し、「国境無き医師団」も、イギリスの個人的なヴォランティア活動とは違うシステムとしての特徴がある。個人よりシステムとしてのカトリック教会を優先するところにカトリックの強みがある。

あるのと全く同じ感覚で、「国境無き医師団」には個人よりシステムとしてのチャリティー活動が優先されるからこそその強みが感じられる。

モーツァルトは大陸文化が生んだ天才である。しかし、その死後イギリスの音楽家が夫人をインタビューしたのによると、シェイクスピアを独語訳で愛読し、「幽霊の怖さ」を表現して『ハムレット』に対抗する意図が『ドン・ジョヴァンニ』にはあったという。またロックなどの思想を生む土壌で生まれたフリーメーソンに加入した。システム変換で激動する大陸の精神土壌（フランス革命でアンシャン・レジームから恐怖政治へ移行するのはその典型）に嫌気がさして、アングロ・サクソンの「清らかさ」志向に似たものをモーツァルトが希求したともいえる。そこで、次の論点に移る。

「清らかさ」志向と王立協会

ヨーロッパ大陸のシステム志向と、アングロ・サクソンの「清らかさ」志向は、現代科学の諸問題にも影を投げかけている。

アインシュタインは確かに原爆に手を染め、後で深く反省したことから、科学者の政治参加のはしりとして、現在のNGOと結び付けられなくもない。けれど、そのことにアインシュタインが深く関わったというより、科学者として発言したことに意味があったといった方が正確である。「科学者の発言」に大きな意味があった時代の産物だと思う。同時にこれは初期の王立協会と政治の関わりを想起させる。科学者の発言が注目を集め、政治のアマチュアとして政治のプロとともに科学と政治の仲をとりもった。

第二次世界大戦直後の「科学者の発言」には、原爆を使って、受け取り方によっては、悪の宗教と化していた科学を、人類の平和に貢献するものに転換しようとする宣言であって、「政治という汚れたもの」ではなく「科学探求の清らかさ」を志向して、と称する宣言の響きがある。「科学者の良心」という言葉が生きていた時代の産物であった。

「政治という汚れたもの」と「科学探求の清らかさ」を対立させるのは、科学と政治を一見切り離すように見えて、実は逆である。「清らかさ」を政治力にして科学者が政治に踏み込んでいるのである。このことについては、「知力や権力と違ってチャリティーはいくらやってもやり過ぎがない」といったフランシス・ベーコンに溯って政治と科学の関係を考えることが参考になると思う。「知は力なり」で「知力が権力になる」ことを指摘したベーコンは、知力や権力には過剰があることを認めた。しかしチャリティーには過剰がないという。チャリティーを知力、権力と並べた上で、こうした発言をするところに、私はアングロ・サクソンの「清らかさ」志向の典型を見る。（実際アメリカの大統領でチャリティー団体を自己の権力基盤とするものがある。また戦後の日本でも原水爆禁止運動を中心に、「清らかさ」を政治力にして、

政治とは一線を画するといいいながら、結果として科学者が政治に踏み込んでいる例は多い。)

ベーコンは実験・観察に基礎をおいた科学の哲学的な立場を見据えた上で錬金術や白魔術の効用をみとめ、エッセイを通して、今日臨床心理学が取り扱うような深い人間洞察を行った。カトリックの精神的支配に対しては、個人的趣味ではなく、大法官にまで上り詰めた法律の知識で法王庁の矛盾をつく論客であったし(つまり大陸の神学に対し、英国の法律学と法律の運用の実際でもって対抗した)、政治と国際問題についてはプロ中のプロである。当時の英国政府の中枢にあって、実際にカトリック教会の精神的支配、スペイン、フランスといった強国の実権的支配を打ち破って大英帝国の発展を「担当」したといっている。

そうしたフランシス・ベーコンは、現代科学技術の諸問題のアングロ・サクソンの特徴のすべてをカバーするほどの知的巨人といっている。一方、同じ時期にイギリスに登場し、科学技術の中核にして発展した大英帝国の文化面を代表して国家的詩人の名をほしいままにした人物がいる。シェイクスピアである。そのベーコンとの影響関係は重要である。(また「清らかさ」志向の線でモラルを問う台詞が多いのもシェイクスピアの特徴である。政治と「清らかさ」志向と科学と王立協会を論じることでも、シェイクスピア論は欠かせない。まず「科学」との関連を考える。)

ハムレットの独白にあるような死を哲学的に考察する観点などでなら、シェイクスピアと科学哲学の関係はきわめて深い。またハムレットの父親の毒殺で耳の穴から毒を入れたら全身に回るといふ、当時最新の解剖学や血液循環理論が作品に取り入れられていることから、シェイクスピアと科学の関係は密接である。フロイトの無意識はシェイクスピアの作品をもとに組み立てられたといわれる。そうした臨床心理学関係の「科学」の観点からもシェイクスピアの作品は興味深い。

ニュートンを生む下地をつくったアングロ・サクソン科学の思想的祖であるベーコンとシェイクスピアは、その関係の密接さを強調すれば、シェイクスピアの作品として伝わるものは、実はベーコンが書いたのではないかという説まで飛び出す。しかしシェイクスピア作品の作者としてのシェイクスピアとベーコンが別個の人格であることは確実だと思う。いわゆるシェイクスピア=ベーコン説はとれない。単純に人のエネルギーを考えても、それぞれに常軌を逸した働きをした二人の巨人がなした業を一人の人間がなした業とすることは、人間の限界を超えている。そのまた一方で、ベーコンのシェイクスピアへの思想的影響は否定できない。あるいは、シェイクスピアがベーコンの科学思想を利用したといった方が正確かもしれない。

具体例をあげての詳述は後にゆずることにして、ここでは科学史そのものがベーコンのシェイクスピアへの思想的影響が大きかったことを証明していることをいいたい。

シェイクスピアの普遍性とは何なのだろうか。それは精神分析を含む心理学や政治経済、国際問題への洞察といった人文科学、社会科学の領域を加えながら、中核に科学原理を据える、

アングロ・サクソン民族特有の広義の「科学」だと思ふ。

それは、これまで論じてきたヨーロッパ大陸中心のシステム志向とは違う「清らかさ」志向のある独得の「科学」であった。そして現実の世界で「清らかさ」を保つには悩みが多い。その悩むことを当初は内乱によって、それから傍迷惑な話ながら大英帝国発展後は世界との戦争によってアングロ・サクソン民族は表現してきた。そして大英帝国終焉後も、その体質はアメリカに受け継がれている。

アメリカはアングロ・サクソン民族の「清らかさ」志向だけではなくヨーロッパ大陸が持つシステム志向も一部受け継いでいる。その結果、人工物システム科学を紹介した発表者がというような分子生物学の成果をアメリカ中心に出す事態にもなり、臨床心理学とあわせて、ニュートン、アインシュタインの正統派科学とは違う「システム」に大きく親和性を示す「科学」になっている。分子生物学は新し過ぎてこうした事情がよくみえない。臨床心理学がヨーロッパ大陸でカトリック教会の神学へのアンチ・テーゼとして出されても、カトリック教会の力が強いがゆえに当初はヨーロッパ大陸では受け入れられにくく、イギリスはそもそも「システム」とは異なる体質を持つために受け入れられなかった。それがアメリカで受け入れられてヨーロッパに逆輸入される。これは、イギリスとは違うアメリカの「システム」への親和性を示すことだと思ふ。

ただし、ヒト・ゲノムの解読がヴェンチャー・ビジネスによって行われたように、そこには戦争が競争かというアングロ・サクソン独得の科学探求の動機づけが絡んでいる。「清らかさ」を力にして戦争という形で「悩む」ことが科学探求の動機づけにもなる。

こうした事情がシェイクスピア学に反映されている。シェイクスピアはイギリスの作家であるにしても、大英帝国とともに、その名声が発展し、大英帝国終焉後もアメリカ文化を深いところで支え続けた。そのことはシェイクスピア研究の米国学位論文を読むことでもわかる。

そこにはイギリスでは考えられないほどのアメリカの実践重視の姿勢がある。(深い思想を含む広義の科学がいかに透徹して人間性を描き出そうとも、文学はそうした探求姿勢とは根本的に違うし、どんなに愚かで狂気に近い行動と見られようと恋愛に人は突き進むことがあるし、そこにしか恋愛の真実はないといったこともシェイクスピアは描き出した。ベーコンの思想を文学に応用するばかりの作業をしたとも見えるシェイクスピア個人が、唯一作品にとどめた独創的作業はこの部分であったかもしれない。この点もここでいう「科学」に含まれる。そしてアメリカの実践重視思想にも反映する。)

以上のことをシェイクスピアとベーコンの没後、清教徒革命を経て、王政復古後ほどなく創設された(1660年)王立協会に注目することで論じてきた。つまり政治と科学と様々な人間の営み(恋愛や音楽を含む)の出会いの場が王立協会であり、ベーコンの理想境であり、王政復古期に復活したシェイクスピア作品であったことは確かだ。それがシェイクスピアの普遍性で

あって同時に大英帝国発展の力の源泉であって、グローバリゼーションの発祥の場でもあった。一口に「清らかさ」志向と王立協会と項目タイトルはつけたものの、それには、これだけの発展性が凝縮していた。

次に論じるべきシェイクスピア研究の米国学位論文に移る前に、シェイクスピアのテキスト校定についてのべる。そこにはシェイクスピアの普遍性、システム志向、「清らかさ」志向の別の側面がある。

(3) マローンのシェイクスピア・テキスト校定

ところでシェイクスピアの普遍性を論じるには、まずシェイクスピアの正確なテキストが必要である。正確な科学的校定によってシェイクスピアのテキストを今日我々が手にするものにしたのは、エドモンド・マローンという人物である。このことを マローンのシェイクスピア・テキスト校定の意義 ソシュールの言語理論とマローンのテキスト、の二項目に分けて論じた。

マローンのシェイクスピア・テキスト校定の意義

マローンはただシェイクスピアのテキストを校定しただけで、一見アングロ・サクソン民族特有の広義の「科学」とは無関係に見える。けれど、この人物が十八世紀の終わりにシェイクスピアの正確なテキストを校定したことは、アングロ・サクソン民族の文明史の中でひとつの事件であった。

この「事件」のまわりに、どれだけ政治経済が、科学が、そして人の心の問題が絡んでいるかは、すぐに説明できる。

マローンによるシェイクスピアのテキスト校定の業績を称え、この業績を金とすれば自分の業績などは真鍮に過ぎないといったのは、政治家のエドモンド・パークであった。

ふたりはアイルランドのダブリンでの演劇運動を通じての盟友であった。そしてパークは、何よりアイルランド出身の政治家として、単なる独立運動に組みするのではなく、英国の中枢に入り込んで政策を左右するまでになってカトリック差別と闘った。インドにおける英国人による現地人虐待を告発し、首相のピット（小ピット）の協力を得て裁判にまで持ち込んだ。

そして、あのタコを揚げて雷が電気であることを証明したことでも有名なフランクリンと通じて、イギリスとアメリカが戦ったアメリカ独立戦争終結のバリ条約に尽力した。

経済学者のアダム・スミスと親交を結び、そのアダム・スミスがグラスゴー大学にいて、同

じ大学の助手であったジェイムズ・ワットの研究を保護し、その研究とは蒸気機関の発明と工業化であった。

パークの業績は、議会の子として、宗教や演劇を含む精神的な運動、政治経済、科学といった広義の文化に関わることで、イギリスとアメリカの政治を大きく動かし、王権と王権による軍事力に対抗したことである。

そのパークが、ただシェイクスピアの戯曲のテキストを正確に校定しただけの業績に対して、なぜ評価の順位を譲らねばならなかったのか。それは単なる謙遜ではないと思う。

つまりシェイクスピアのテキストには人間の精神のあり方から政治経済、科学を含む深い思想が刻まれていて、それはアングロ・サクソン民族の将来を左右するものであったといえるし、それがシェイクスピアの普遍性ではないかといったことはすでに述べた。

これに加え、マローンのテキスト校定には、アングロ・サクソンの「科学」が持つ、大きな普遍性の要素を示唆するものがあると思う。

正確なテキスト校定というだけならキャクストンが15世紀にロンドンに印刷所を開いて以来出版登録制度もあるイギリスならではの研究といえる。シェイクスピアのテキストの場合はそれだけにとどまらない。

王政復古期にシェイクスピアが復権したとき、ドライデンを始めシェイクスピアの共鳴者たちもシェイクスピアはすぐれてはいるが時代後れなので時代にあった改作が必要と考えていた。マローンはそうは思わなかったのか、シェイクスピアが書いた通りのテキスト再現に力を尽くした。その結果、今日になってみると、シェイクスピアだけに特有の性質を私たちは享受することになった。即ち、シェイクスピアの「翻訳を乗り越える」性質である。

古今東西、すぐれた古典文学は多々あるものの、翻訳すれば質が落ちることは否めない。その中でシェイクスピアほど翻訳で質が落ちない文学は少ないといわれる。どんな国の言葉に訳されても、またジャンルを違えてオペラになってもバレエになってもミュージカルになっても、ときには言葉のない舞踏になってもシェイクスピアの作品の本質は伝えられる。

一方文学といえばフランス文学といわれ、文学用語として「美しいフランス語」の名声を一頃までは保っていたフランス語で書かれた文学の数々は、むしろ翻訳が難しいから、特殊に洗練された言語としてのフランス語の名声を高める一方、各国の翻訳技術を鍛えることになる。我が国でも、フランス文学を翻訳することで日本語の中に特殊な「文学的文体」が醸成されることになった。堀口大学から大江健三郎まで、仏文出の香りのする日本語による文学日本語が一世を風靡した時代も確かにあったと思う。

ここにソシュール流のシニフィアン、シニフィエに関わるシステム論との関係が人工物システム科学とも関係して浮上する。

ソシュールの言語理論とマロンのテキスト

ソシュールの言語理論から引き出される「異なる言語間のあらゆるニュアンスを訳出する翻訳は不可能」と書いたことを少しだけ詳述する。

ソシュールが言語と現実の対応関係に必然性がないことを主張したわかりやすい例として、よく説明されるのは、日本語では虹は七色だが英語では六色だというものである。

光のスペクトルをどの波長からどの波長までを区切って色を表す言葉と対応させるかについては、必然的な法則はない。それを七つに区切ろうと六つに区切ろうと、その国の言葉の勝手である。

また日本語で「赤い戦い」「赤い手を持つ」などといっても何のことが俄かにはわからない。英語でレッド・バトル、ハヴ・レッド・ハンズといえ、血みどろの戦い、殺人を犯す（手で血で汚すから）という意味になる。レッドと赤では言語の中の連合関係が違うからとソシュールは説明する。赤とレッドでは対応する光の波長も違えば、それぞれの言語の中での連合関係も違う。だから「異なる言語間のあらゆるニュアンスを訳出する翻訳は不可能」なのである。

単に色を表現すればいいのなら、光の波長が何ナノメートル（あるいはオングストローム）かを記載すればよい。けれど、「夕日に赤くそまる」を「日没に向かう太陽の何ナノメートルの波長の光を反射して」と記載してよいのは科学論文だけである。

ソシュールのいう言語理論で言語の恣意性（現実と言葉の対応に理由がないこと）言語の連合関係（同じ赤い色を表す言語でも、血への連想が強かったり弱かったりするように、各国語によって言語体系の中での他の言葉、意味内容との関わりが違う。）といったことを強調すればするほどフランス文学のようなシステムとしての文学性が強調され翻訳がしにくくなる。その対極にある科学論文は、むしろ現実との対応関係を重視すれば、言語体系の変換としての翻訳のむずかしさは少ない。

よく日本文学は外国人には理解されないという意識を日本人が持つ。その理由の一つにソシュール流の言語システム論で説明がつく部分はある。それは王朝文学（源氏物語、和歌）などの場合で、言語の連合関係を駆使したフランス文学のようなシステムとしての文学性が強調されたものだからだと思う。

ことなるコンピュータ・システムで互換性がない場合は、しかし、苦勞していったん互換性を持つ装置を開発できれば、たちまちシステムを連結して運用できる。同じようにフランス文学や日本の王朝文学は、苦勞して翻訳はなされ、日本の王朝文学は意外に世界に通用する。『源氏物語』然りである。昭和天皇の和歌がよく引用されるのも、内容の面以外に、王朝和歌と同じ洗練された文体の和歌である点が大きいと思う。

生活短歌や私小説が世界で理解されにくいのは、内容の異文化間障壁があって、言語のソシュール

ル流の連合関係が整備されていない面があるからではないか。

以上を踏まえてシェイクスピアを考えると、驚くことにシェイクスピアは文学でありながら、ほとんど科学論文に近い特質を持つ。

ハムレットがオフィーリアを強い磁力がある金属に喩えて近づくのは、現代の目から見ればさしたる才能も感じられない陳腐な比喩に見える。しかし、ベーコン以来、ニュートンの万有引力の法則に至ってさらにファラデーなどに続く伝統として、モノとモノとがどういうメカニズムで引き合うかは科学哲学の関心をひく主題であった。それがスコットランドとイングランドといった国と国の統合論にまで援用され、現代からいえば政治論、文明論とまで結びつく。

ベーコンが哲学的考察をするだけで熱が発生するメカニズムを解析して分子の活性化という現代科学に近い結論を得たことは有名である。そこに至るまでにアニマル・スピリットを論じ、情動や熱も結び付けられる。

シェイクスピアでは夜明けという時を表すだけに「朝と夜とが互いに自分の領域だといって争う」といった表現をする。それを原始的なアニミズムに結び付けて文学としてだけ論じるより、ベーコンなどの科学哲学との関連を考えた方が私はよいと思う。一滴の水と水がひきあうことを踏まえた比喩で、双子の兄弟を捜して異国に来た心細さと自らのアイデンティティを問う表現をする。スピリットが空中に入れば行動が二倍に活性化することを受けて、門の中の恋人（「私の魂」という表現で恋人に呼びかける）に夜中でも愛の歌を捧げ憐れみを誘おうとする行動の表現にする。「一滴の水と水がひきあう」「スピリットが空中に入れば行動が二倍に活性化する」といったことは、すべてベーコンが問題にした事項である。

要するにベーコンなどが森羅万象のエネルギーな動きを「科学的」に捉えようとする思考の緊張感をそのまま自己の文学的表現に取り入れてしまったのがシェイクスピアだと思う。

そう考えれば、もしシェイクスピアが現代に生きていれば、「夕日に赤くそまる」を「日没に向かう太陽の何ナノメートルの波長の光を反射して」と表現しかねないと思う。（もちろん、それだけでは光が波だと認識する科学探求が行われたときの緊張感がない。むしろ現代なら液晶の色をめぐる技術が争われる現場感覚の科学技術的表現を文学の色の表現に取り入れたらシェイクスピアに近くなる。）

シェイクスピアは当初からフランスでは評判が悪かった。ラシーヌなどに比べて古典演劇としての法則、文法を無視して、表現が粗削り過ぎるといわれ続けた。ソシュール流のシステムとしての整合性には問題があり過ぎるほどある。日本の王朝文学の方がはるかに整備された言語システムを持つ。

にも関わらずシェイクスピアが古典として生き延びたのは、表現の中のシステムとしての整合性より、現実を科学的に捉えようとして、かなり正確な事実認識に迫る緊張感のせいだと思う。人工物システム科学ではなく、人間の内なる自然も含めた英米の自然科学の伝統の表現者

といった面があるからだと思う。

シェイクスピアを単なる文芸史、演劇史の領域にとどめるのではなく、政治経済との結びつきをいう傾向もシェイクスピア学者の間に出てきた。

こうした傾向の中で、シェイクスピアの作品は英国憲法のような発言があったり、王政復古期から名誉革命を経て、アメリカの独立戦争からフランス革命までの時期、ホイッグとトーリー、カトリックとプロテスタントといった様々な勢力のぶつかりあいの中で、シェイクスピアの普遍性が人々にみとめられ、マローンのテキスト校定に結実するという捉え方も出てくる。

しかし、そうした時代を超え、宗教的、政治的立場を超えた普遍性を持つのは、古典といわれる作品なら何にでもいえることである。シェイクスピアの特異性は、文芸史、演劇史に、政治史をちょっと加味しただけでは、充分理解出来ない点があると思う。

十六世紀の終わりから十七世紀初頭にかけてロンドンに花咲いたエリザベス朝、ジャコビアン朝演劇史の中で、あまりにシェイクスピアは突出しすぎている。現代とはかなり異質な感性と人間理解を持った人々の芸術だということを、同時代の他の演劇からは思い知らされるし、時代の差を割り引いてはじめてその時代の演劇にも現代に通じる普遍性があることが理解できるのに対し、シェイクスピアにはそれが無い。そうした時代の差を意識する手続きなしに、いきなり現代の我々の人間性への洞察を突きつけてくる。この「普遍性」の迫力は尋常ではない。

この謎をとく鍵は「科学」にあるのではないか。

ベーコン、ニュートン、アインシュタインと続く英米の科学史が語る普遍性でシェイクスピアの普遍性が説明できるのではないか。精神分析を含む心理学や政治経済、国際問題への洞察といった人文科学、社会科学の領域を加えながら、中核に科学原理を据える、アングロ・サクソン民族特有の広義の「科学」がシェイクスピアにはある。それは人間の脳で完結するシステム科学ではなく、システムと現実の対応を重視する。同時にシステムへの批判を政治性をおびた活力にしてシステム探求にも逆に生かすものなのだ。

それを証明するには、まずベーコンの思想がどれだけシェイクスピア作品に反映しているかを探る。また、現代のアメリカでシェイクスピアがどう捉えられているかを把握することも有効だと思う。

ベーコンが夢想したニュー・アトランティス、夢想を現実化した王立協会の先に現代アメリカがあると思う。アングロ・サクソンのモラルが支配し、科学技術立国の地なのだ。(『嵐』の孤島のモデルがニュー・アトランティスだという説はシェイクスピア=ベーコン説の匂いがし過ぎてすぐにはシェイクスピア学者の賛同が得られないかもしれない。ニュー・アトランティスが魔法使いの住む島のように見るとする導入部分の記述など、『嵐』の孤島のモデルがニュー・アトランティスだということは疑いがないとは思わせるものの、こうした側面に光を

当てることを、シェイクスピア=ベーコン説がかえって妨げている。シェイクスピア=ベーコン説を補強することになるために、二人の影響関係まで否定される不幸がある。一方、この孤島が結果として現代アメリカを指し示しているという主張は、シェイクスピア学、英文学の世界では広くみとめられている。英米文学の分岐点としてシェイクスピアを位置づけるとき、アメリカへの流れの道筋は『嵐』の方向なのだ。)そこで現代アメリカのシェイクスピア研究学位論文を数多く読んでみたいと思う。(ニュートンの古典力学のような原理の現実への適用と応用だけでなく、システム科学は生物論から生まれ、生物のように増殖するという。そのような政治性をおびて増殖する活力が米国学位論文にある。)

(4) 米国学位論文

アメリカのシェイクスピア研究学位論文は、各論文の指導教官が属している学界の影響を受けて、マルキシズム、フェミニズム批評、ポスト・コロニアリズム批評、臨床心理学的批評などが並ぶ。論文の作者の中には、論文が評価されて出版され、本人が著名な学者になって学界を方向づけるものも現れる。しかしその数は少ない。

それなら何故に出版された研究書や学会誌を通じてアメリカのシェイクスピア学界そのものに注目しないで学位論文段階のものに注目するのかといえ、多くの学位論文の「データ」によって、必ずしも文学やシェイクスピア学にとらわれないアメリカ全体の傾向が「シェイクスピア研究を通して」わかるからである。そのことを、いずれもタイトルの頭に「アメリカのシェイクスピア研究学位論文」という言葉を付けた上で 社会時評の根本原理 家族 危機管理 世界観、といった4項目に分類したい。

アメリカのシェイクスピア研究学位論文と社会時評の根本原理

いわゆる出版ジャーナリズムやテレビ、インターネットといったメディアで「アメリカ的なもの」が論じられるとき、その根本原理になることがアメリカのシェイクスピア研究学位論文には盛り込まれている。その範疇に入ることをこの項目で論じたい。そのために、さらに細分してa) 自由なモラルや宗教 b) アイデンティティ c) 文化的訓練の3項目に分ける。

a) 自由なモラルや宗教

アングロ・サクソン民族がカトリック教会やフランスの権力といった大陸の精神的な、ある

いは実権としての支配の影響を、やや弱く受けていたために、ルネサンス以後、宗教やモラルについて、比較的自由的な考え方が出来た点が論じられる論文が書かれる。

次のような論文がある。

Lope de Vega はスペインの偉大な劇作家である。シェイクスピアと年代はそう違わない。同じイタリアのソースから ‘Castelvines y Montesés’ (ハッピーエンド) を書く。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』と比較し、Lopeの方が深い死を考察した愛のモラルを描くとする。⁵

こうした論文が書かれるアメリカ事情を考察すれば、1990～1991年頃、アメリカがイラクに対し経済制裁か軍事行動かでゆれた湾岸戦争のとき、一国の軍事行動がこれほどのガラス張りの公開というケースも例がないだろうといわれた。国内のユダヤ・ロビーの圧力の存在も指摘されマスコミが議論を公開しながら戦争が行われた。しかしこうしたことは湾岸戦争に始まることではなく18世紀にアメリカとイギリスが戦争したときもイギリスでは議論が沸騰し反戦キャンペーンも行われた。ルネサンス、中世へと溯れば、スペインはイスラムとの戦いの前線基地であった。スペイン、ポルトガルはローマ・カトリックが支配する地域であって、しかもイギリスと敵対したり援助を期待したりで縁が深い。ローマ・カトリックやイスラムといった一種の宗教絶対主義に議論しながら戦いを挑み、ここ数百年戦争を続けたのがアングロ・サクソン民族である。同じソースから出来たスペインの作家とシェイクスピアを比較するとは、一種の宗教絶対主義環境下での愛と死を見つめる作品と、宗教絶対主義に議論しながら戦いを挑む(これまで大陸のシステム対アングロ・サクソンの「清らかさ」志向とって来たことの極限の例になる)環境下での愛と死を見つめる作品の違いともいえる。

この論文とベーコンとの関連をいえば、‘THE ESSAYS’の中の‘OF REVENGE’というエッセイで、ベーコンは、「赦しは人間の栄光」とソロモンはいうといい、復讐の連鎖の愚かさを説く。復讐の連鎖の最大の要因である「宗教絶対主義」に「議論しながら戦いを挑む」アングロ・サクソン民族の姿勢は、ベーコンにすでにある。同時にシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』のテーマそのものである。

b) アイデンティティ

自由なモラルや宗教の代償として、とくにルネサンス以降、国家を背負った個人が、自分や国のアイデンティティについて悩むことになった点について論じられる論文も多い。これはアングロ・サクソン民族が、とくに現在までの二百年間、世界を相手に「悩みながら戦争した」

⁵ Cynthia, Rodriguez Badendyck, *The lovers of Verona in Lope de Vega and Shakespeare : problems in comparison*, (1990).

理由にもなる。世界はアングロ・サクソン民族のアイデンティティの悩みに、戦争という形でつきあわされたことになる。そうしたことが論じられる論文が書かれる。

例えばクレシダはコケットではなく戦争に引き裂かれた若い女性だととらえる論文がある⁶。

論文が書かれるアメリカ事情を考察すれば、湾岸戦争に参加しながら戦争の cause（大義名分）を見い出せないアメリカの若者の心情が報告されて数年後、戦争ではアイデンティティーを見失ってしまうことがアメリカ人の心になりに浸透した時期であった。

ベーコンとの関連をいうなら、ベーコンの‘History of Life and Death’では万物の action として‘one drop of water moves towards another’という表現がある。類似の表現がシェイクスピアの『間違いの喜劇』にある。シェイクスピアのテキスト校定を論じた項目で、テキストに「科学」性があるってベーコンと通じることを述べたときにも引用した。これは双子の兄弟の一方が一方を捜し求める表現であってアイデンティティを考えこむ要素として考察される。アイデンティティという言葉は使わなくとも、ベーコンやシェイクスピアには国境を超える人間観がある。英語のアイデンティティが単なる住所、氏名ではすまない意味を付与されるようになった文化的背景だと思う。

この論文は「戦争に引き裂かれた若い女性」を強調するフェミニズムの趣きもある。

フェミニズムに関わる論文は、アイデンティティ関連の論文として分類できると思う。そもそもアングロ・サクソンが世界に挑む戦争は、アイデンティティに悩む弱者がアイデンティティの確立した強者に挑む戦いであった。古代から中世という、ローマやフランスの支配への挑戦が然り、現代アメリカになってからは、旧世界への新世界からの挑戦が然りである。

軍事的には世界で唯一の強さを誇る今日になっても、アイデンティティ問題では「挑戦する弱者」の姿勢をくずさない。アラールの神への信仰によって自爆テロを辞さない人々に比べたら、星条旗の下に団結しても、アイデンティティが確立しない悩みはアメリカ人には尽きないはずである。

ブルカという確固としたアイデンティティの確立の象徴をまとうアフガン女性に対して、「人権」「民主主義」といった、絶えず問いかけ考え直さねばならないアイデンティティが確立しない価値観を選ぶように（代償として、知的好奇心など、様々な近代的価値を身に付けるチャンスが与えられ、近代女性としての活力が得られるものの）強要する戦いをアメリカは進めねばならない。アメリカのフェミニズムとは、そのような性質を持つ。

中でも科学やフランシス・ベーコンと関係の深いフェミニズム批評は「データ」といえるほどに数をそろえられる迫りに考察すべき重要性があると思う。

⁶ Zambon-Palmer, *Angela, Character Conceptions of Shakespeare's Cressida in Major Twentieth-Century Productions*, (1995).

数よりは質を尊ぶ学界では天才的な着想で高く評価される論文が一本あればそれでいいことになる。数はさして問題ではない。しかしフェミニズム批評では事情が違ってくる。一般に「差別」といったものの本質は「質によって差別される数」であるともいえるとさえ思う。選ばれることで質を高めようとする学界は本質的にフェミニズム批評を好まない。そして理屈だけのことならフェミニズム批評には論理的破綻が少なくない。

例えば寡婦の運命でシェイクスピアの登場人物の女性を分析した論文⁷がある。シェイクスピア時代の「寡婦の運命」を際立てることの意味は何なのだろうか。

論文が書かれるアメリカの事情を考察すれば、フェミニズムには女性という弱者救済のチャリティー活動的側面がある。英米には「チャリティーは力」という考え方があって女権拡張という「力」を論じる面とも符合する。レーガンの保守主義とは家族主義、健全主義であったのに対し、1990～1991年頃、ベビーブーマーが台頭し、「反体制の60年代」を指導した人々のUP WITH PEOPLEの流れが目立つようになる。これはGMの会長などが入る慈善運動的グループである。またパット・チョートが「影響力の代理人」というロビー活動の分析をするように、地域に溶け込もうとする日本企業の社員の活動（日本側からは単なる近所付き合い、アメリカ側からはチャリティー的活動に見える）はロビー活動やスパイに見えるという。当時のブッシュ（父）政権はPoint of Lightというヴォランティア活動に頼る面を見せる。

ベーコンとの関連をいえば、『THE ESSAYS』の中の‘OF GOODNESS AND GOODNESS OF NATURE’では、むきだしの力も「知は力なり」の知力も、過多に得ようすると墮落するが、チャリティーを過多に行っても墮落しないという。チャリティーを力と見なして強く奨励する姿勢がベーコンにある。シェイクスピアの『リア王』ではチャリティにも触れ、貧乏人や差別されている人の心情として富の配分問題を描く。これを原始的共産制や実存主義と結び付ける解釈がかつてあった。しかしチャリティー、弱者救済、フェミニズムといった線の解釈の方がベーコンの思想に合致する面が大いにあるし、90年頃のアメリカの政治にも合致する面がある。

けれど、具体的にシェイクスピア研究論文になった場合、例えば上記の例で「寡婦の運命」を際立てると、「寡婦」救済の運動がアングロ・サクソンの社会ではむしろ権力であることを考えると、権力志向のプロパガンダなのか、本当に弱者に味方するのははっきりしなくなる。さらに、それをシェイクスピアがどう描いたと捉えるのかもはっきりしない。

「女性は差別されている」という意識で論理的破綻なく「学界を方向づける」論文を書くことは至難のわざだと思う。一方、博士論文の審査が通ればアカデミズムに籍を置けるが通らなければ籍を置けない、多くはまだ二十代の女性たちが「学界を方向づける」ことなどには無頓

⁷ Oakes, Elizabeth Thompson, *Heiress, Beggar, Saint, or Strumpet: the widow in the society and on the stage in early modern England*, (c1990).

着のまま「女性は差別されている」という意識で情熱をこめて多くの論文を書く。それがシェイクスピア研究論文であるがゆえに、直接社会における女性差別の実態を訴えた社会学的な論文よりグローバリゼーションとの関係を良く示して、より深くアメリカの実態を報告するものになっていると思う。

このことを説明するには、先に「フェミニズムと科学」の関係を説明した方が早い。

昨今の流行になっている「フェミニズムと科学」の論点を私なりに整理すれば、科学は感情を押し殺した客観性を科学に志す人間に強要し、「科学は所詮女性には無理だ」といった差別発言を生み、一方、科学が権力と結びつく背景によって、科学と権力と男性が結合して家父長的差別感覚で女性差別を助長するということになる。そうした考え方を世界に普及した核になる哲学的言説はベーコンの「知は力なり」であって、ベーコンの「知」は、まさに後にニュートンやアインシュタインが展開した近・現代科学の出発点なのだということではないか。

例をあげよう。

女性の男装（シェイクスピア作品、とくに喜劇で頻出する）はフェミニズムか家父長主義への服従かといった問題を提起する論文⁸がある。

論文が書かれるアメリカ事情を考察すれば、論文が書かれて二年後、1992年はアメリカ政界における女性年といわれた。女性議員などの進出がめざましかった。女性議員は自由主義派が多く、女性票でクリントン政権が支えられた。

ベーコンとの関連をいえば、まさに「科学史とフェミニズム」問題でベーコンの家父長的考え方が問題になる点と関連する。面従腹背で実質的に陰で支配権を持つ日本女性や、絶対性を帯びた聖母マリアの規範に従うヨーロッパ大陸の女性とは違って、家父長主義にある程度反抗しながら服従もして、結果として家父長が支配するヒトという動物の群れをつくるのがアングロ・サクソン民族ではないだろうか。

このことを念頭におけば数多くアメリカの学位論文で書かれるフェミニズム批評傾向のシェイクスピア研究論文に説得力が感じられる。

敢えていえば、逆にこのことを念頭におかなければ、フェミニズム批評傾向のシェイクスピア研究論文には疑問が多く生じてしまう。

男性と権力が結びついて「女性いじめ」をする演劇ならシェイクスピアの同時代には数多く書かれた。同時代の演劇を対象にフェミニズム的論理を展開するなら、シェイクスピアを選ぶ必然性がない。ことにフェミニズムが中心になってシェイクスピア研究で流行語になったとも思える「家父長的」という言葉にはさらに疑問が生じる。

シェイクスピア時代のイギリスに家父長的権力構造があったことは否定しない。しかし、純

⁸ Chang, Hsiao-hung, *Transvestite sub/versions : power, performance, and seduction in Shakespeare's comedies*, (1990).

粹に家父長的権力構造を探求するために演劇の材料を選ぶとき、どうしても16世紀から17世紀にかけての英国に的を絞る、さらにシェイクスピアの作品に注目しなければならない必然性はないと思う。

必然性がないばかりか、家父長的権力構造がシェイクスピアを特徴づける最大の要素とは思えない。そうなると、あらかじめフェミニズムの理論を用意しておいて何でもかんでもその餌食にしてやろうという御都合主義的フェミニズムの一例かとも思われてくる。シェイクスピアを（ただ大作家として目立つからという理由で選び）餌食にするだけのフェミニズム批評では、「男性と女性の役割分担は時代によって社会によって色々あるだろうに、一定の見解を押し付けられても」という割り切れない思いが残るだけの論文になってしまう。事実、そうした見地からフェミニズム傾向の論文をすべて無視するシェイクスピア研究者もいる。

フランシス・ベーコンの科学観、女性観を問題にする科学史とフェミニズムの観点は、こうした事情をがらりと変える。この観点にたてば、フランシス・ベーコンと同時代に、その思想的影響を強く受けて書かれた作品はシェイクスピアに限られるし、「家父長的」という言葉をキーワードにするフェミニズム理論のすべてに必然性が加味される。さらに王政復古期にシェイクスピアが復活した時代背景に王立協会やニュートンがいたこととも整合する。

そして王立協会の先にある科学技術立国の国アメリカであればこそ、そこで男女の区別をしない科学技術と市場経済の世界での競争を生き抜くことを強いられるアメリカの女性であればこそそのフェミニズム批評とも考えられ、論文作者の体験と論文対象の作家が必然の糸で結ばれる。

そして古代を含む壮大な文明論（人類の歴史5千年を、まず女性原理支配の2千5百年、次に男性原理が支配する2千5百年という風に分ける）はともかく、聖母マリアを中核にしたシステムの中に女性を影の存在として組込むヨーロッパ大陸に対し、傭兵の供給国ブリタニアで、兵士である男性によりそい家族をつくる、いわば生物としてのヒトの営みに近い「自然」な自己主張が出来るアングロ・サクソンの女性という、結局は大陸と英米の戦いになるし、何度も繰返すシステムか「清らかさ」志向になる。「清らかさ」志向は簡潔にチャリティーということに言い換えられる。ヨーロッパ大陸のようなシステム化された人間の知の体系か、アングロ・サクソンのように欲望に基づく行動を我欲を度外視したチャリティー的行動で制御するかという問題にもなる。

女性を弱者として弱者救済を主張するフェミニズムに限らず、一般のマイノリティー問題は、そのマイノリティーに属する人々のアイデンティティ問題を引き起こす。グリーンブラットのコロニアリズム論によって植民地政策と国籍と言語の関係を論じるもの、⁹ 戦前は坪内逍遙か

⁹ Baker, David John, *Who talks of my nation? : colonialist representation in Shakespeare and Spenser*, (c1991).

らの訳、戦後アメリカの影響でやっと韓国語訳が出来たという韓国でのシェイクスピア研究を報告するもの¹⁰、といった具合に植民地問題を論じる論文は多い。

シェイクスピア喜劇、『フォースタス』などについて魔法論を展開し、『嵐』分析で魔法をかけることもとくことも人間の限界提示とする論文¹¹もマイノリティー問題を扱っているとみなせる。『嵐』の島は植民地であって、原住民の怪物キャリバンはマイノリティーの代表である。またプロスペローは権力を追われた人間がマイノリティーのすがる杖として魔法を学んだ。古代、中世、ルネッサンスと、ヨーロッパ大陸に比べればマイノリティーであったアングロ・サクソン民族が、錬金術など異端の学問も参考にして魔法ならぬニュートンの近代科学を杖とし、アメリカという島をまず支配し、世界支配に乗り出して行くことは、何よりの、こうした論文が書かれる「アメリカ事情」考察になる。

c) 文化的訓練

ルネサンス以降、ラテン語と聖書学がアングロ・サクソン民族の師弟にほどこされる学問的訓練の必須科目であって、この教養を背景にベーコンやニュートンの科学が生れた。これは大陸の宗教的情熱に代わるアングロ・サクソン民族の知的情熱の源になる。こうした知の強制への反発までもが民族的能量に取り込まれる点が論じられる論文をここに分類する。

コロラド・シェイクスピア・フェスティバルの記録をそのまま博士論文にして認められたものがある。¹²

シェイクスピアの上演の記録といった実践的なものは「学界を方向づける」こととは無縁でも「そこまで実践を重視するか」といったアメリカにしかない特徴になる。「上演という実践」の記録で博士号がとれるのはアメリカならではである。

論文が書かれるアメリカ事情を考察すれば、1991年頃、日本は学ぼうとする伝統（儒教）があるのに、アメリカには学ぼうとしない伝統があるとアメリカの教育担当の責任者が嘆いた。バブル崩壊までは日本のシステムが評価され、アメリカの実践重視に疑問符がついた時期があった。それでも実践の伝統を堂々と論文にすることは止まない。民衆の力への信頼と誇りが感じられる。日本の儒教的な「本」中心の「お勉強」の伝統と、アングロ・サクソンの「実践と結びつく」伝統、および、特にアメリカの「実践重視」の伝統は日英米の大きな特徴だと思う。

ベーコンとの関連をいえば、ベーコンの‘THE ESSAYS’の中の‘OF NATURE IN MEN’には‘bend nature’という言葉も出て、人間の内なる「自然」を矯正する努力が語られる。ハー

¹⁰ Kim, Jong-hwan, *Shakespeare in Korea : 1906-1989*, (1992).

¹¹ Swedlow, Jessica Eve, *Art to Enchant : Shakespeare's magic*, (1990).

¹² Nichols, Lynn Wayne, *The Evolution of the Colorado Shakespeare Festival*, (c1992).

ブには水を与え、雑草は除草して「良い」植物を育てるように人間の性質改善をいう。鞭でラテン語を若者にたたきこみ人文科学思想を学習させたルネッサンス期のイギリスの教育が偲ばれる。一方シェイクスピアには「星の名付け親より下を散歩する人」(『恋の骨折り損』)「哲学なんて糞食らえ」(『ロミオとジュリエット』)といった強制的なラテン語教育への反発と実践重視の姿勢もみられる。『ソネット集』ではベーコンの「ハーブを育て雑草を取り除く」比喩に対抗するかのように「花と雑草を区別しない愛」「学問の力にはひれふすよりほかになくとも私には心がある」といった当時の学問へのコンプレックスを実践で克服しようとする態度がみなぎる。

1590年代に歴史的文学的哲学的現象としてセネカの伝統が確立したとする¹³論文がある。セネカのオーヴィッド的ヴァージルの聖書のインターテキストが復讐悲劇の象徴的枠になるとし¹⁴「彼女は女だ、ゆえに求愛せられるべき・・・」といった『タイタス・アンドロニカス』の例にみられるセックスと暴力を描くシェイクスピアの表現を分析する。¹⁵この論文と、『タイタス』という映画を考え合わせれば文化的訓練についてのアメリカ事情が浮かび上がる。

『タイタス』はディズニーの『ライオン・キング』をブロード・ウェイ・ミュージカルに演出して名をはせたジュリー・テイモアがシェイクスピア作品に挑戦した作品である。夫のエリオット・ゴールドマンの現代音楽やジャズをクラシック調の映画音楽に取入れた音楽でも話題になった。まさに「知の強制への反発までもが民族的エネルギーに取り込まれる」アメリカ的なクリエイティブ尊重が生んだ映画芸術の典型だと思う。

アメリカのシェイクスピア研究学位論文と家族

聖母マリアを中核にしたシステムの中に女性を影の存在として組込むヨーロッパ大陸に対し、傭兵の供給国ブリタニアで、兵士である男性によりそい家族をつくる、いわば生物としてのヒトの営みに近い「自然」な自己主張が出来るアングロ・サクソンの女性といったことをフェミニズムの項目で論じた。そこからアングロ・サクソン民族は「家族」を尊重するといえる。それは国家システムと結びつかない生物としてのヒトの営みに近い「自然」な「家族」である。儒教、儒学を通じて国家システムと結びついて国家統治の手段になったアジア的「家族」とも違う。このことを、さらに細分してd) 家庭教育 e) 自由恋愛 f) 大衆を意識し流通する芸術、の3項目に分ける。

¹³ Sutherland, *Jean Murray, Shakespeare and Seneca : a symbolic language for tragedy*, (1985), p.24.

¹⁴ Ibid. p.118.

¹⁵ Ibid. p.119.

d) 家庭教育

国家の枠組みが弱く、モラルや宗教の国家による押し付けが弱い一方、家庭教育が重視される。貴族や市民の家庭の父と子の関係がむしろ王と皇太子の关系到反映されて国家の行く末を決めるような教育立国的側面がとくに英国にはある。アメリカを含め、様々な世界での世代交代問題にも家庭教育の投影がある。そうした論点が論じられる論文をここに分類する。

父と子の関係を歴史劇でたどる、叙事詩的感覚の論文がある。¹⁶

論文が書かれるアメリカ事情を考察すれば、1990年頃の中東危機では日本に対し「軍隊送らねば同盟関係ではない。憲法見直しに日本よ恥じをかけ」といった思いを一部に抱かせる圧力をかけるような精神がアメリカにあった。その3年後、おそらくはアメリカの戦争姿勢に対する日本人の不安な心理があつての議論の一つとしてであろう、17世紀英国独特の愛国心や、アメリカ独立戦争でイギリスがアメリカに負けたことを吉田茂が日本の敗戦になぞらえたことなどを日本の政治学者が解説したりした。イギリスの nobility、アメリカの soldiership といったアングロ・サクソンの「武ばった精神」（日本の武士道を尊重する）がある。その精神とこの論文を書く興味は深いところにつながっている。

ベーコンとの関連をいえば、ベーコンの 'THE ESSAYS' の中の 'OF NOBILITY' に貴族主義と民主主義、経済との関係を考えさせる記述がある。今も残る英国独特の貴族感覚、教育の理想像があつてシェイクスピアのフォールスタッフがそのアンチテーゼになっている。ベーコンは当時から今に続く貴族主義の伝統を示し、シェイクスピアはそれを受け継ぎつつ庶民的反発も書き込んだということだと思う。

社会学的歴史的コンテキストとテキスト -- 上演問題といった新しげな手法で、ヘンリー・シリーズは、結局国家や政治から家族と個人に焦点が移っていることを指摘した論文¹⁷がある。これなども、生物としてのヒトの営みに近い「自然」な自己主張が出来るアングロ・サクソン民族であればこそ、ライオンの家族のような（そういえばジュリー・テイモアが演出した『ライオン・キング』はライオンの父と子の関係を描き『ハムレット』を踏まえている）家族と、ライオンの群れが行う権力闘争のようなヘンリー・シリーズの物語展開があることの証になる。

e) 自由恋愛

アングロ・サクソン民族ほど若い男女の自由恋愛を尊重する民族はない。シェイクスピアの作品の中核に「科学」があるとしたら、「科学」の普遍性を使ってシェイクスピアは自由恋愛の概

¹⁶ Buck, William Stuart, *Shakespeare's epic of fathers and sons*, (c1990).

¹⁷ Martin, Richard Alexander, *Textual theatricality: the figure of the stage in Shakespeare's second Henriad*, (c1990).

念を世界に押し広め、アメリカ映画の援助を受けて、ついに世界基準にしたともいえる。自由恋愛は、それを妨げる権力機構と戦う力を持つ意味において、政治と深く結びついている。シェイクスピアと映画やミュージカルとの間連を考察するものは単なる趣味的な考察ではなく、アメリカという国家や民族を代表する芸術であるがゆえの必然を感じさせる。

シェイクスピアの映画の分析（ゼフィレリの『ロミオとジュリエット』とピータ・ブルックの『リア王』）をした論文がある。¹⁸ 手法の違いは作品による必然とも思える。ゼフィレリは『ロミオとジュリエット』ブルックは『リア王』なのだから。前者は考証的リアリズムが相応しい恋愛悲劇、後者は象徴劇の色合いが濃厚である。こうした映画の技術論がそのまま博士論文として通用する点にむしろ特徴がある。

論文が書かれるアメリカ事情を考察すれば、1993年にオードリ・ヘブパーンの死に際しての文章が話題になって女性の生き方について考えさせられるものがあつた。つまり映画スターとして映画の主人公と女優の姿がダブるのに、落差もあるという点である。その背景にはアメリカが世界に普及させた「映画的ヒューマニズム」があつて、その中で人生論を展開する習慣を先進諸国のマスコミを中心に世界の論壇の一部に普及させた。その結果「恋する女性」が社会と切り結んで、どう「戦う女性」あるいは、ときに「庇護を求める女性」になり、この「女性」という枠を外して「人間」として生きるかという問題が注目を浴びる。ゼフィレリの『ロミオとジュリエット』もブルックの『リア王』もオードリ・ヘブパーン論と同じく映画的ヒューマニズム論考を前提にした映画技術論の対象になったのだと思う。

ベーコンとの関連をいえば、ベーコンの‘THE ESSAYS’の中の‘MARRIAGE AND SINGLE LIFE’によると、ベーコンにとって恋愛とは喜劇の主題で、悲劇でもちょっと扱われることがあるものという。恋愛に過度にのめりこむのは駄目だともいう。作劇側に立つシェイクスピアは過度にならざるをえなかった。この点はベーコンとシェイクスピアの「思想」が近くとも、演劇を鑑賞する側と演劇を造る側の違いが端的に出ていて興味深い。ベーコンはシェイクスピアと違って「過度」をいさめた。しかし、科学思想を通じて、ベーコンが意図しなかったほど「過度」にアングロ・サクソンの、科学思想的「ヒューマニズム」は世界に普及し、シェイクスピアの力もあつて、あらゆるものにとらわれない「自由恋愛」の思想が「映画的ヒューマニズム」を形成したのだと思う。

f) 大衆を意識し流通する芸術

ヨーロッパ大陸の絵画や音楽に対して、英国は独自の芸術を持たなかった。大陸の芸術を輸

¹⁸ Biesinger, Kathy, *Style and signification in Shakespeare film : a study of the narrative realism of Franco Zeffirelli and the symbolism of Peter Brook*, (1991).

入し、ときに売買する国際意識と流通する情報への意識が芸術と結びついている。その結果、観客を意識し、情報流通を意識する演劇という独特なジャンルで英国は世界的な地位を獲得した。それは、そのまま科学技術と結びつき、アメリカの映画芸術に受け継がれる。そうした点が論じられる論文をここに分類する。

馬術の観点でシェイクスピア作品解析をした論文がある。¹⁹ シェイクスピアのソネット集にみられる一種ホモ的な友情が、カウボーイの友情に通じると指摘。おしゃべり女を制御するシェイクスピア時代の刑具に馬を統御する馬術の知識が応用され、シェイクスピア作品に馬術の専門的知識がどれだけ生かされているかを論じる。

論文が書かれるアメリカ事情を考察すれば、大衆芸術（西部劇）としても、実際存在としてもカウボーイという存在が廃れていない地域で、一見女権尊重にみえて、男性が権力の骨格と枠組みを造り、女性はそこに抵触しない「花」の役割を強いられる精神がシェイクスピア論文にまで登場する。テキサス州に女性市長が多いのは市長職は名誉職で給料が安く、騎士道精神で女性に花を持たせるからだといわれる。アングロ・サクソンの「武ばった精神」はイギリス貴族、アメリカの軍人精神に加え、テキサスのカウボーイ精神があることがわかる。さらに悠久の歴史に想いを馳せれば、古代ローマ以来、アングロ・サクソン民族は傭兵の供給国であった。勇猛果敢な男性が戦場に趣き、婦女子が留守を守り、少年を勇猛果敢な男性に育てる責務を負うゆえに女性としてもある程度勇猛果敢さを持つ女性の地位は、家父長に従う家族という意味では従属的で上記のように「花」の役割を強いられる面があっても、ヨーロッパ大陸諸国のように男性の権力ゲームの陰で完全に「花」か「人形」かといった扱いを受け女王の存在を否定されるわけではなかった。傭兵は権力ゲームの主体ではなく、イングランドの地理は外敵の進入を防ぎさえすれば（あるいは外敵を王家として祭り上げてしまえば）住民の「話し合い」で統治できる面がある。それがアングロ・サクソン独特の「民主主義」を生んだともいえる。

ベーコンとの関連をいえば、ベーコンの‘THE ESSAYS’の中の‘BEAUTY’で美少年の美は腐りやすい夏の果実だという。(人間について「美」を問題にすると、女性がまず問題になるのが現代であるのに対し、男性が問題になるところに時代の差がある)「美」はVIRTUEとは必ずしもいえぬともいう。シェイクスピアのソネット29番は運命を呪うことから「愛」へ移行して救われる心情を歌う。この「愛」の対象が腐った果実とベーコンがいう(シェイクスピアもときおり美少年の不道徳を表現するとき腐った植物のイメージを使う)美少年へのものだとすれば、戦火が遠くない激動のドラマを感じる。日本の中世の「能」と美少年愛、戦国武将との関係も連想される。

傭兵の供給国ブリタニアの伝統はカウボーイに姿を変えてアメリカに受け継がれ、戦場を市

¹⁹ Nelson, Barbara (Barney), *Shakespeare's use of horsemanship language*, (1990).

場に変えて「戦い」は日々繰広げられる。

生物としてのヒトの営みに近い「自然」な自己主張が出来るアングロ・サクソンの女性ということをフェミニズムの項目で書いた。そのことを描き出す映画を中心にしたアメリカ文化は、若者や女性の支持を得て国境を越えて世界に広まってゆく。そのことが感じられるシェイクスピア論は多い。黒澤映画を論じるので日米文化比較かと思いきや序破急を「能」から読み取り、映画・演劇の技術論をするもの、²⁰ チャールトン・ヘストンがクレオパトラの演じにくさについて語ったことなど、俳優のインタビューをまとめたもの²¹、など映画についての技術論、『十二夜』を実際に演じて、ヴァイオラの両性具有心理を考察したもの²²、といった映画造りにすぐに応用できそうな論文も多い。

アメリカのシェイクスピア研究学位論文と危機管理

あらゆるものに政治が浸透するアングロ・サクソン民族という民族の性質は、官僚や君主が専制的に君臨する国家システムを半ば否定した代償ともいえる。国家システムを動かす専門家（官僚や専制君主）にすべてを任すわけにはいかないからである。「民意」があらゆるものに口を出し、専門家による支配を嫌う以上当然の帰結である。さらに、そうした民族の性質は国家システムを構築して権力を独占したい世界中の権力者と衝突する。その衝突はここ二百年ばかりの世界を相手にして戦争ということになる。こうした結果アングロ・サクソン民族は危機管理と民意の反映にすぐれた権力構造をもたないではいられない。こうした論旨を g) 危機管理と民意の反映にすぐれた権力構造 h) 個人主義 i) 狂気と人間心理への関心、の3項目に分けて論じる。

g) 危機管理と民意の反映にすぐれた権力構造

海峡ひとつへだてて大陸と接し、国内に険しい山を持たないイングランドは、人間を組織化することでしか国を防衛し政治的な秩序を保つことが出来ない。すぐに他国に支配されかねない環境を逆に利用して、危機管理にすぐれて、しかも民衆レベルにまで話し合いで意思決定を行う、アングロ・サクソン独特の民主主義と権力構造を築き上げた。そうした点が論じられる論文をここに分類する。

²⁰ Lai, Ming Liang, *Akira Kurosawa's use of Noh in "The throne of blood", his film adaptation of William Shakespeare's "Macbeth"*, (1993).

²¹ Soughers, Leslie A, *Immortal Longings Voluntary Death in Antony and Cleopatra*, (1995).

²² Acosta, Gena, *An Acting Analysis of Viola in William Shakespeare's Twelfth Night*, (1995).

登場人物の君主の戦争責任論のようなものを論じた論文がある。²³

論文が書かれるアメリカ事情を考察すれば、湾岸戦争での「アメリカの強烈な意志と実行力」を踏まえ、アメリカをこそ研究すべきという声があった。そういう研究が行われるのはイギリスだけだともいわれる。今なお世界と戦争する気概があるのはアングロ・サクソン民族だけだともいえる。臨戦態勢で書かれたアングロ・サクソン民族の古典文学を、臨戦態勢の感覚で批評したのがこの論文だともいえる。

ベーコンとの関連をいえば、ベーコンの‘THE ESSAYS’の中の‘THE TRUE GREATNESS OF KINGDOMS AND ESTATES’で、国家は量より質であり、法、憲法、慣習、などについて偉大なものは滅多になく、時の運で大帝國にもなるという。世界を相手に戦争して大帝國を築きながら、ある種の達観もある当時の国家指導者の感覚がよくわかる。シェイクスピアはそうした感覚を共有しながら作品を残した。この論文は「登場人物の君主の戦争責任論」という「民主党的」立場をとりながらも、現代のアメリカ政治とベーコンやシェイクスピアが活躍した時代のイギリス政治とをつなぐアングロ・サクソン民族共通の「世界を相手に戦争して大帝國を築く臨戦態勢の感覚」がよくわかる。

歴史劇やローマ劇に対する「政治的考察」は世界の現実の国際政治をリードするアメリカならではのものがある。シェイクスピアの歴史劇の登場人物の戦争責任を問い、ローマ帝國の統治体系や法律運用を参考にして英雄論を展開することと、世界に関わるアメリカの現実の国際政治は驚くほど密接な関係がある。まだシェイクスピア学のプロになるかならないかの段階にいるアメリカ人の意識がシェイクスピア研究の多くの学位論文の「データ」によって示されれば、それは現実の国際政治にたずさわるアメリカの政治家の意識を半ば示すものともとらえられる。シェイクスピア学のプロになりきらない分それだけ一般のアメリカ人インテリの意識に近いともみえる。

h) 個人主義

自分という個人を見つめることで友人関係、健康、富を得ることなどにまつわる問題を解決しようとする。個人の尊重は社会の圧力を弱め、日本では考えられない放縦や犯罪も生む。それでも徹底して個人の利益やモラルを追求しようとする。そうした点が論じられる論文をここに分類する。

演劇としての効果を社会儀礼の場面設定で高めながら社会的評価と個人としての生き方のず

²³ Chang-seop Song, *The politics of desire : William Shakespeare's "history" and the question of subjectivity in "Richard III", "Richard II", "Henry IV", and "Henry IV II"*, (1993).

れを描く論文がある。²⁴

論文が書かれるアメリカ事情を考察すれば、時代は1996年に下るものの、価値を生み出すのは会社ではなく個人だとアメリカ市民権を獲得していうと、日本人には珍しい奴だと意気投合したアメリカ人技術者がいたという話がある。1992年頃、大統領候補として勢いがあった富豪のペローは自分の成功の歴史的意義づけにしか注目せず人々をがっかりさせるということがあった。市場経済で付加価値を見出して成功する原理が、実際の社会で通用したりしなかったりして、そうした個人中心の原理そのものを何度も見直す作業をアングロ・サクソン民族はここ数百年行ってきた。それがシェイクスピア研究にも反映したのがこの論文だと思う。

ペーコンとの関連をいえば、ペーコンの‘THE ESSAYS’の中の‘WISDOM FOR A MAN’S SELF’では自己に忠実であれととき、自己の利益をはかり過ぎることについて、プリンスではある程度許容されても官僚では許されないことがあるという。ローマの英雄のような自己犠牲を尊び、社会が自己愛かという問題意識を提起する。シェイクスピアはそれをそのまま詩、劇に応用している。シェイクスピアの場合は、自己を映す鏡という、鏡映イメージは強烈な印象を読者や観客に残す。その背景には、「自己をみつめること」がアングロ・サクソン民族の繁栄の根幹であったという事情があると思う。

18世紀初頭ロンドンでの、ただ正統性に無関心なことからショービジネスへの移り変わりを演劇界を分析し、シェイクスピアの作品を時代の好みにあわせる風潮を解析した論文がある。²⁵

論文が書かれるアメリカ事情を考察すれば、1991年頃、バブル崩壊前の日本社会との対比から、自由奔放なアメリカ 離婚後の子供の消息知らず、子供同士が結婚 が論じられた。あまりに自由な個人が勝手にやる社会は、その反動で客観性や正統性を希求したりする。18世紀初頭ロンドンは王政復古期の自由さ（ちょうどアイザック・ニュートンの姪のキャサリン・パートンの浮き名を流す行状が科学史では問題になる）から次第に婚姻への倫理的な法規制が英国教会の宗教的儀式と結びついて強まる時期であった。シェイクスピアにおける「正統性」は、まず18世紀末のマローンのテキスト校定があって、ジョージ王朝風、ヴィクトリア王朝風、エドワード王朝風と続く大英帝国の文芸、芸術様式での、ある種の秩序があってはじめて形成される。そこに行く前の無秩序をショービジネスと正統性との関係でとらえる論文は、第一義的には当時の英国の正確な状況認識であって、しかも現代のアメリカの自由過ぎる弊害を意識したことと無関係ではないと思う。そこから18世紀初頭ロンドンと現代アメリカをつなげるアングロ・サクソンの伝統が感じられる。

²⁴ Giese, Loreen Lee, *Denied identities : social rituals in selected Shakespearean drama*, (c1991).

²⁵ West, Katherine Noel, *Shakespearean Comedy and the Early Eighteenth-Century Theatre: "All this we must do, to comply with the taste of the town"*, (1995).

ベーコンとの関連をいえば、ベーコンにはナルシズムについての考察が多い。個人主義ゆえに、社会の圧力が弱く、すぐに利己主義との対比をいうアジアとも、神や教会支配のあるヨーロッパ大陸とも違う、社会をとびこえて個人がすぐに科学的客観性や芸術、倫理、宗教の「秩序」と向き合う傾向が強い。イギリスではオックスフォード、ケンブリッジ両大学の学閥意識と政治的影響力とに、この問題が結びつき、ベーコンも候補の一人になるアンチ・ストラトフォードリアン・セオリー（シェイクスピア作品の作者はストラトフォードの田舎から出てきた人物の作品ではないとする説）が現れる。私見では学閥的権力が一番強いオックスフォード大学でかえってその傾向が少なく（演劇の理念的側面より宮廷劇以来の実演の歴史的考察が主流）そこに批判的な勢力、とくに学閥的権力側に入りそびれた人々がストラトフォードリアン・セオリー（シェイクスピア作品の作者はストラトフォードの田舎から出てきた人物、つまり様々な肖像画でお馴染みの、あの人物の作品とする説）主流の学会への反発もあってアンチ・ストラトフォードリアン・セオリーにのめりこむ面があると思う。アメリカのシェイクスピア研究論文では、どだいオックスフォード、ケンブリッジ両大学の学閥意識と政治的影響力が存在しないので、この観点はあまりなく、ショービジネスと正統性の問題だけを問題にしよう。

ショービジネスとしての演劇技術論や市場経済社会の権力構造を意識した分析は、オックスフォード大学やケンブリッジ大学を卒業していなければ演劇界や政界をリードできないイギリスとは事情を異にする。学歴がものをいうイギリス社会の常識が生み出した各種のアンチ・ストラトフォードリアン・セオリーより、ショービジネスの天才としてのシェイクスピアに注目するアメリカの研究論文（シェイクスピアをはっきりショービジネスの天才と規定するのではなくとも、ショービジネスとの関係を論じるものとしてのシェイクスピアを論じる）の方が、シェイクスピアの人物像として正確な議論を展開していると思う。

自分でも詩劇の台詞や詩が書けるショービジネスの天才が、ベーコンや十七代オックスフォード伯といったインテリ集団やその思想を利用することはありうる。ブロード・ウェイ・ミュージカルやハリウッド映画の天才シナリオライターがハーバード大学を出ていなければならない理由はアメリカにはない。そのことをシェイクスピアと結び付けてあからさまに言わなくても、アメリカのシェイクスピア研究論文にはそうした論調が感じられるものが多い。

現在のイギリスのシェイクスピア像は、マロンのテキストやドライデンの改作によって形成され、多くは十八世紀以後の資料によって伝説化され、ヴィクトリア朝を経た正統感覚を付与されたものが多い。

アメリカの感覚は、その中につもりつもった虚像の塵を一時吹き払う作用をするものがある。アンチ・ストラトフォードリアン・セオリーをめぐるものはその一つではないか。（決定的証拠がなく状況証拠に頼って「シェイクスピア像」という「解釈」の問題を闘わせることである場合、アメリカとイギリスの現状における演劇感覚が大きく作用すると思う。）

i) 狂気と人間心理への関心

シェイクスピアは人間が狂気に至る心理を丁寧に描き、後にユング系の心理学者などがアーキタイプと呼んだイメージを作品に生かす。ベーコンが人間の感覚器官を分析したことの影響も感じられる。この伝統は王政復古期の改作でも生きる。アメリカでは心理カウンセラーと契約することがステイタス・シンボルになり、シェイクスピアの心理学的批評も盛んである。

主人公の自己客観化に寄与する「良きカウンセラー」がシェイクスピア作品には登場すると指摘した論文がある。ハムレットにホレイショ、リアにケント。また『アントニーとクレオパトラ』のエノバパス、『コリオレイナス』のメネニウスなどのヴァリエーションがあるという。²⁶

論文が書かれるアメリカ事情は、繰り返し指摘する、アメリカ社会でのステイタス・シンボルにまでなった心理カウンセラーの存在である。

ベーコンとの関連をいえば、ベーコンの‘THE ESSAYS’の中の‘OF COUNSEL’でローマ的な心許せることを論じたことをシェイクスピアが恋愛に応用し、「恋愛という病気の治癒」にまで応用して喜劇作品に使っている。『お気に召すまま』にはカウンセリングで恋愛の悩みを治すと称して、結局、男装の女性が想う相手に近づこうとする場面がある。臨床心理カウンセラーの淵源がここにあるといっても大袈裟ではないかもしれない。

1990年頃に書かれたこの種の論文は多い。レトリックを心理学と言語学の結合として、シェイクスピアなどを分析したもの、²⁷ ブリュエルの『イカルスの墜落』を扉に掲げ、臨床心理学的読みで、『尺には尺を』を捉えたり、デカルトやセルバンテスなどを例に、哲学と心理学の間を彷徨うといった感覚の論文、²⁸ ヴェールを被った女性ということでシェイクスピア作品の登場人物女性の曖昧さを論じるもの、²⁹ 完璧を求めたアンジェロが影の領域へ入り、おとなになることを拒絶するトロイラス、原始的魂アニマの女性ヘレナ（終わりよければ...）欠陥両親を持つ落胆（ハムレット）といった人生の不幸を克服するユング的視点で作品の登場人物を規定するシェイクスピア論、³⁰ などである。

1995年頃になると、歴史劇、シドニーをマゾヒズムで解析したもの、³¹ 無残に父を殺された

²⁶ Datta, Pradip Kumar, *The role of the good counselor in selected Shakespearean Tragedies*, (c1991).

²⁷ Krystian Mare Czerniecki, *The rhetoric of melancholy : Shakespeare, Racine, Kleist*, (1991).

²⁸ Jacques Lezra, *Icarus reading : trope, trauma, and event in Shakespeare, Cervantes, and Descartes*, (1990).

²⁹ Jones, Kathryn Blair Logwood, *Shakespeare's veiled women : icons for the problem of female ambiguity*, (1990).

³⁰ Porterfield, Sally F., *Inner players : a Jungian reading of Shakespeare's problem plays*, (c1992).

³¹ Ellis, James Richard, *Architectonics of the Self: Negotiating Male Subjectivity in Elizabethan Narrative Poetry*, (1995).

がゆえに人間性と距離をおく、ルネッサンスとして新しいタイプの悪党としてのグロスター公爵分析、³² 中年以後の鬱についてシェイクスピア作品との関連の中で論じたもの、³³ などが現れる。

論文が書かれるアメリカ事情は、これらについてもアメリカの臨床心理学志向であることに変わりはない。これに10歳の少年たちが二歳の坊やを髑り殺し、英国が喪に服し、国としての誇りを失うという1993年2月の出来事を加えてもいいであろうか。

シェイクスピアの本家を自任するイギリスと、シェイクスピアを参考にして組立てられた臨床心理学を含む心理カウンセリングが盛んなアメリカとの興味深い関係がそこにある。突き放した言い方をすれば、英米ともにカトリック教会中心に構築された中世以来のヨーロッパ大陸のシステムを壊す方向性を持つ精神土壌にある。それが市場経済と科学技術が結びついた現代文明を築いた。その歪みとしての人間の心の破綻に対処するとき、アメリカは臨床心理学、心理カウンセリングといった「システム」を構築し、イギリスは、それを一部とりいれながらイギリス伝統の「なるべくシステムによらない人間関係重視」の姿勢できた。しかし、イギリスの方で、まるでユング流の心理カウンセリングのトラウマの典型のような事件が現実に入ったのだ。英米が決して遠い関係にはないことを如実に示す事件であったと思う。

アメリカのシェイクスピア研究学位論文と世界観

これまでシェイクスピアの背景にはアングロ・サクソン特有の「科学」思想があって、それが科学技術社会論と関係があることを述べてきた。それをまとめることがアメリカのシェイクスピア研究学位論文を考える中でできることをいいたい。これも細分してj)「清らかさ」志向k)言語表現への関心l)世界観、の3項目に分ける。

j)「清らかさ」志向

真摯に真実を探求し、逆境の中で富を得る奇跡を望んでも名声を求め過ぎず、国家を滅ぼすような墮落をしないと誓う。科学的な探求にも透明感を求め、目や心といった人間の「器官」を水晶の珠のイメージで捉える。そうしたことが論じられる論文をここに分類する。

Gallows humor (死などを気味悪く扱うユーモア) をシェイクスピア作品で追及した論文が

³² Evans, Christopher W., *Determined to Prove a Villain: A Reexamination of Shakespeare's Duke of Gloucester*, (1995).

³³ Feak, Marcus David, *Aspects of Kleinian Life Span Psychology*, (1995).

ある。³⁴ 文字どおりシェイクスピア作品に現れる処刑について論考。赦し方も含め政治的というより宗教的な面も探求している。カトリックのイメージがあるかないかも論じる。王政復古期でのシェイクスピア復活を念頭におくと、チャールズ一世の処刑（カトリック傾向の強い君主が清教徒革命の進展の中で殺害された）を強く連想させる論文だと思う。

論文が書かれるアメリカ事情を考察すれば、1990年頃の不況下、米国のフィランソロピー活動について、日本は宗教に寄付するが、米国は芸術、教育へ寄付するという報告があった。アメリカは労働力市場再編で競争力をつけようとする。失業者を平等に扱い、再教育、訓練を行う。戦後の復興時にも日本が経験したことから、日本は集団での団結を重視し、昭和天皇のはげましに見られるような皇室を中心にした奉仕的精神で苦境をのりきる傾向があった。日本の皇室自体そうした「清潔さ」の伝統はある。そこを通して芸術、教育などへ寄付がさりげなく（全く皇室など意識しない形で、あるいは、日本での上品さの香り付けとしての「キリスト教」の衣さえまとして）ゆく。個人主義のアングロ・サクソンは直接振興すべき事柄へ寄付がゆく。アイデンティティーに悩むアングロ・サクソンがチャリティーを力にすることと表裏一体。アングロ・サクソン以外の旧世界は求心力を持つ精神的指導者や団体を介して同じことをするともいえる。アングロ・サクソンでは、逆境の暗い面を求心力を持つ精神的指導者や団体に託さないで個人で引き受けるので、暗さを暗いままに乗り越えるユーモアが生まれるのではないか。

ベーコンとの関連をいえば、ベーコンの‘THE ESSAYS’の中の‘OF ADVERSITY’で、奇跡は逆境で起こり、繁栄は悪徳を発見し、逆境で徳を発見するといったことが書かれている。アングロ・サクソンでは、逆境の暗い面を求心力を持つ精神的指導者や団体に託さないで個人で引き受ける傾向があるものの、教会の役割がないわけではないはずだ。ベーコン、ニュートン、アインシュタインと続く科学がこの傾向に拍車をかけたかもしれない。逆境を乗り越えるために奇跡などを待ち望む心理について、どんなに近代的な機関でも、集団になれば非合理的信念を鼓舞する必要が生じる。この面を掘り崩す近代科学は、逆境を乗り越えるために非合理的信念よりユーモア（集団より個人尊重になる）の方に重点を移さざるを得ない。

k) 言語表現への関心

シェイクスピアの研究者は言語、レトリックに関心がある。外観と実際、日常と非日常、会話の趣味の良さ、褒めることといったシェイクスピアの様式的な表現の源になる問題意識も言語そのものへの関心から来ている。

³⁴ Spencer, Janet Marie, *The politics of mixed-genre drama : the comic treatment of punishment spectacles in Shakespeare*, (c1990).

70年代にシェイクスピアと言語不信論が流行ったことから説き起こし、プラトニックとソフィスティックの区別も援用して、喜劇を論じる論文がある。³⁵ 弔意の表現といいながら、葬式というより、死を嘆く場面。感情中心の分析をした論文がある。³⁶

論文が書かれるアメリカ事情を考察すれば、一般的なシェイクスピア研究者の言語表現への関心以上に、アメリカ特有の精神的な事情があるように考えられる。1992年秋にフリーズ（動くな、動くと撃つぞ）という英語を知らなかったために命を落とした日本人留学生在がいた。Trespass（領域侵犯）という英語を持ち出して、この文化的背景を説明するむきもある。聖書を持ち出し、独得の宗教的信念と生存競争が結びつくアメリカの精神的土壌は、近代をへて文明化され過ぎたイギリスより16世紀、17世紀のシェイクスピア時代を彷彿とさせるものがある。ハロウインの祭のおふざけの雰囲気の中に突然銃声が響いたこの事件は、臨床心理学的な分析（コミュニケーションのとれない相手が祭の仮装をして自己の管理領域内に進入してくるときの心理）も可能であると同時に、聖書を持ち出し、西部開拓時代を振り返ってのアメリカ分析も可能である。そしてシェイクスピアと欽定英訳聖書を生んだ16世紀、17世紀のイギリスとの共通性もある精神土壌を考えさせる。

この論文とベーコンとの関連をいえば、‘THE ESSAYS’の中の‘OF SEEMING WISE’でベーコンは、傾きかけた商人が金持ちぶるように、中身がないほど利口ぶるという。外観と内面のずれがテーマになっている。テーマというよりシェイクスピアの場合は言語表現の一種になっている。スピーキング・ピクチャー（言語で描く絵、あるいは目で見る言語といったもの）がシェイクスピアの表現の特徴だといわれる。それは「花の顔の陰に隠れた蛇」（ロミオに惚れた後、ロミオが敵の御曹司と知ったジュリエットが運命の裏切りを感じて言う）といった抽象的なことを表す。それがそのまま外観と内面のずれを表現する。‘OF DISCOURSE’では平凡で退屈な会話は避けるべき、しかし重大過ぎることや、憐憫の必要なことは避けよという。ブルジョアの欺瞞的でお上品な会話のマナーとばかりもいえない。シェイクスピアは同時代の他の作家に比べれば全体として優雅な感覚に満ちている。時代全体がどぎつuitために誤解されがちであるものの、シェイクスピアはベーコンの意図を十分作品に生かしている。‘OF CEREMONIES AND RESPECT’では現実的であるために高德が必要といい、石は（輝くには）引き立て役なしで宝石としての資質を必要とする（引き立て役があって宝石が輝くというシェイクスピアの表現は、これに反抗したのかとも思う）という。とにかく日常と非日常を対比するこうした視点はシェイクスピアの場合は詩の表現様式ともいえるものになっている。‘OF PRAISE’では ointments（宗教的な意味がある香り）は花の香より長続きし、一般人の

³⁵ French, Tita, *A rhetoric of comedy : essays on language as a theme in Shakespeare's comedies*, (1985).

³⁶ Kazarian , Albert I., *Shakespeare's representations of mourning in seven plays*, (c1990).

PRAISEは鏡にうつる影のようなもの、FAMEは川のようなもので軽いものを浮かべるとする。self, lieなどについて深く考察しているものの、演劇人シェイクスピアとの立場の差は明らかだと思う。シェイクスピアはそこまで宗教、国家を尊重せず花の香のみ強調。演劇人としてFAMEを否定するわけにはいかない。いずれにしても以上のことがシェイクスピアでは言語による表現（宗教、運命、価値観といった言語に迫力を与える要素が後ろに控えた表現）に集中して現れる。

こうした関心の延長として、一切意味に立ち入らずソネットの意味の切れ具合のみを問題にし、会話の終わり、意味のまたがり等を考察した論文³⁷ 『ハムレット』を新しいコミュニケーション論で論じた論文³⁸ などが書かれる。『冬物語』の四幕でフロリツェルがパーディタのダンスを評しmove stillということをつえ、自然との関係で言葉遊びを回復したロマン派の詩人コーリッジ論にも持ってゆく論文³⁹ はシェイクスピアと19世紀イギリスとの関係を言葉の側から論じたものともいえる。ベーコン、ニュートンを通じて科学の側から主張してきたことの傍証になるのではないか。次の論文はこのことの説明になる。

オセロの武勇伝の語りは「唯一オセロがデズデモーナをたぶらかす魔術」という形でオセロが身の潔白を示す語りの中に現れるとし、この場面を引用してシェイクスピアの「語り」全般を論じる論文⁴⁰ は言語への関心を越えた重要性がある。小娘が台所仕事をし、客間に食事などを運び、その合間に客の武勇伝を小耳に挟んで客に惚れるといった図は、オペラにはふさわしくないのか、ヴェルディの『オテロ』ではカットされてしまった。

考えてみれば科学実験には小娘の台所仕事に似たところがある。

かつてガリレオを中心にしたヨーロッパ大陸の科学革命の裏には聖俗革命があるといわれた。宇宙の捉え方をはじめ、科学的真理に含まれる、かつては神的世界観に属したことが、カトリック教会という聖権の独占物ではなくなった。イギリスの場合は、この「俗」であることが徹底して、オペラで描かれるような英雄の世界でもなく、小娘の台所仕事に似た実験・観察で科学的真理が語られることになった。「オペラとデカルト」に対して「演劇とニュートン」という大陸に対するイギリスを突き合わせると、システムの整合性を重視するオペラや、思索によるシステムの整合性に重きを置き過ぎたデカルトに対し、小娘の台所仕事が英雄の色恋沙汰に侵入する演劇と、実験を軽視しない着想を得るニュートンが対比される。これは平易な言葉による詩を掲げたロマン派の詩人にも通じるし、王政復古で復権したシェイクスピアを支持する詩

³⁷ Hawkins, Paul, *Toward a Practical Poetics of Rhythm: Kinds of End-Stop and Enjambment*, (1995).

³⁸ Lortie, Denis, *Pour une Approche Pragmatique de la Communication dans la Tragedie d'Hamlet, Prince du Denmark, de William Shakespeare*, (1995).

³⁹ Kennard, Lawrence Rochfort, *Coleridge and Rehabilitation of Word Play*, (1995).

⁴⁰ Haslem, Lori Schroeder, *And thereby hangs a tale : stories and storytelling on the Shakespearean stage*, (c1990).

人でドライデンの意思を受け継いだのはロマン派の詩人であったともいえる。

1) 世界観

天体観測から発展し、やがてニュートンやアインシュタインにつながる宇宙観。それが現代では常識になった科学的世界観であるものの、社会の階層構成や建築、庭造りに至るまで、また大衆音楽の歌の歌詞に月や星を登場させるときにまで反映するほどに血肉化した民族は、アングロ・サクソン民族だけかもしれない。

「社会的表象」という言葉を含む標題どおり、エリザベス朝演劇を社会的に捉えようとして、ヒエラルキーに関心を示して作品分析した論文⁴¹がある。モラル、罪、性などに関わるエンブレムをロマンス劇から集めて論考した論文⁴²がある。ソネット55番の愛の永遠性を中心にヨーロッパ詩学の伝統でシェイクスピアを論じ、ネオプラトニズムも出てくる論文⁴³がある。これらはシェイクスピアを論じることで、実はアングロ・サクソン民族の世界観を語ろうとしているのだと思う。

先にこうした論文とベーコンとの関連をいえば、『THE ESSAYS』の中の『OF VICISSITUDE OF THINGS』というエッセイほど世界観という観点で刺激的なものはない。知識は記憶、新奇は忘却、恒星と周期的「時」のみ不変といい、地震、アトランティス、宗派の争いについて考察し、世界は円環の物語であるという。ベーコンの真実を直感し、時の伝統的な擬人化も採用し、美的感覚も加味したのがシェイクスピアだと思う。

歴史劇の「未来」=変化と論じた論文⁴⁴、ラカンやベーコン、ロック、アリストテレスなど交えたバロック芸術論を展開し、ダンの詩や『嵐』に言及する論文⁴⁵などは、ベーコンのエッセイを踏まえてみれば、また特別に意義深く感じられる。とくにバロックで括るところに意味があると思う。そこでシェイクスピアからニュートンまでの考察に芸術上の時代区分の名が冠せられる。バロックと錬金術はよく結び付けられる。バロックと正統派のニュートンに頂点をおいた科学が結び付けられないことはないのではなからうか。栄誉の絶頂期、ニュートンはヘンデルのオペラが上演されるロンドンにいたのだ。

こうした論文が書かれるアメリカ事情を考察すれば、シリコンバレー（ITという最新の手

⁴¹ Holbrook, Peter James, *The social symbolism of literary modes in the English Renaissance: social interplay in Shakespeare, Nashe, and bourgeois tragedy*, (c1990).

⁴² Cho, Kwang Soon, *A study of emblems in Shakespeare's last plays*, (1990).

⁴³ Schwartz, Louis, *Old love's great power: mimesis, imitation, and the authority of poetry in Petrarch, Wyatt, and Shakespeare*, (c1990).

⁴⁴ Hartley, John David, *Shakespeare's Concepts of the Future in the Tetralogies*, (1995).

⁴⁵ Bornhofen, Patricia Lynn, *Cosmography and Chaography: Baroque to Neobaroque. A study in Poetics and Cultural Logic*, (1995).

段で「アメリカの夢」を追う場)ではマナーとクオリティ・オブ・ライフが対立概念だということが参考になる。ベーコンの‘THE ESSAYS’の中の‘OF BUILDING’というエッセイでは、四季、泉などについての考察があり、‘OF GARDENS’というエッセイでは庭造りの楽しみについて自分でやらぬ王侯には味わえないものとされる。

世界観につながる原理的発見が科学技術を発展させ、そこで金をもうけたら、そうした世界観を確かめ味わえるような質の高い生活を望むのが、ニュートンの昔も、シリコンバレーの現在も変わらないアングロ・サクソン民族の生の営みではないだろうか。

(5) おわりに

以上の考察を終えて、シェイクスピア学と科学技術社会論の相関関係の深さにあらためて驚かされる。

まずシンポジウム’02『21世紀における科学技術システムの再構築と科学技術政策の新しい役割』のプログラム自体、欧米中心に組立てられながら一部アジア（中国、韓国、日本）が取り入れられていることがシェイクスピア研究の米国論文を数多く読んだ印象に酷似している。この理由は本質的なものである。本稿で考察した通り科学技術の発展を中核にしたグローバリゼーションの現象そのものがシェイクスピアを復活させ世界的に受容させた現象と重なるからだと思う。

ヨーロッパと日本の「アゴラ」的対話か、アメリカ流に「政治」と「権力」のダイナミズムを肯定した上での「憲法」を模索かという、最近の京都議定書をめぐる環境問題は深刻な現実的実践的問題である。繰り返しになることながら、その背景にNowotnyの「啓蒙思想の合理性とロマンティックな主観的、美学的側面、想像力と感情の領域がポストモダン思想で統合され、市民と科学が対話するアゴラを提唱する」といった認識と、Jasanoffの西側諸国で「18世紀の終わりに憲法が国家権力を制限したように、現在企業の権力を規制する憲法制定に挑戦すべき」といった認識の微妙なずれがあるなら、環境問題という実践の場で、世界はこれから再び18世紀終りの欧米の対立を経験することになるのだろうか。

シンポジウム’02『21世紀における科学技術システムの再構築と科学技術政策の新しい役割』では英国人の発表もあった。発表の直接的な内容より、上記の「アゴラ」か「憲法」か、という欧米の対立軸を念頭に聞けば、英国人特有の冷静な分析が目立つ。すぐには理想を求めず冷静な分析の上で目標をたてる。それはシェイクスピア劇がプロットの繯れを解きほぐして大団円にむかうのに似ている。

そうした過程で問題になりシンポジウム最後のパネルディスカッションでも話題になった

publicとprivateの対立は、私には『ハムレット』の演出などで王や王妃の私室の場と、正式の謁見の場の区別を想わせる。シェイクスピア学では、実際、演劇の中だけでなく、現実の国政の場で王が公私の場を区別し始めたとされる。それがシェイクスピア劇に反映したという。シェイクスピア劇では、公私の区別に対応して、正義を標榜する政治的発言や公式の信仰表明と、個人的欲望や、親子、恋人への想い、死への恐れが対立的に表現される。

科学的発見や発明が公共財か私有財産かといった議論は、そのまま科学的発見や発明を「正義を標榜する政治的発言や公式の信仰表明」と関わらせるか「個人的欲望や、親子、恋人への想い、死への恐れ」と関わらせるかに置き換えられる。

シェイクスピア学と科学技術社会論の相関を考えることは双方にとって有益だと思われる。